

# 平泉遺跡群発掘調査の記録

—発掘調査報告書から—

三 浦 謙 一※

## 1 はじめに

古代末期の11世紀、奥羽では大規模な二度の戦い、前九年の役（1051－1062）、後三年の役（1083－1087）が起き、豪族である安倍氏、次いで清原氏が滅びた。唯一の継承者となってその両者の地盤と権力を引き継いだのは奥州藤原氏初代清衡である。清衡は1100年を前後する頃、江刺郡豊田館を出て平泉へ進出、1189年（文治5年）、四代泰衡の時に源頼朝に滅ぼされるまでの約90年間、平泉は奥州藤原氏の拠点であった。

平泉における発掘調査<sup>1)</sup>は1950年に花館遺址、1952年に無量光院跡で行われ、以降、1950年代から70年代初めにかけて、平泉遺跡調査会が毛越寺跡ほかの寺院、次いで柳之御所遺跡を調査、1970年代には東北自動車道関連遺跡や鈴沢地区の行政発掘、また観自在王院跡の復元整備に伴う調査が実施されたが、当初から12世紀の平泉研究における埋蔵文化財の重要性が認識され、その後の発掘調査に継続されていった。

1980年代に入ると、史跡整備目的の内容確認調査が毛越寺で始まり、80年代半ばからは社会資本整備や住宅建築等に伴う行政発掘が急増する。そのような中、1988年に開始された柳之御所遺跡の調査は平泉の歴史的解明に欠くことのできない質・量とも豊富な考古学データをもたらし、考古学にとどまらず学際的研究にとっても大きな画期となるものであった。同時に、現在の市街地と重なる志羅山遺跡や泉屋遺跡などが広範囲に調査され、さらに衣川北部や太田川南部・北上川東部・西部丘陵など、周辺部へも調査は拡大した。1990年代には中尊寺跡の内容確認調査も始まる。2000年代前半には大規模開発に伴う行政発掘調査は一段落し、現在は小規



図1 遺跡範囲図

39 西光寺跡  
20万分1地勢図「一関」

※ 岩手大学平泉文化研究センター

1) 1930年に小田島禄郎が毛越寺金堂円隆寺の雨落溝を発掘調査している。

模な行政発掘調査や柳之御所遺跡・無量光院跡の内容確認調査が継続して行われている。

長期間、多くの次数を重ね蓄積されてきた平泉遺跡群の発掘調査成果は膨大であるが、その内容・考古学データが十分に周知・理解されているとは言い難い。

本稿は、主に1980年以降2014年3月末までに刊行された発掘調査報告書<sup>2)</sup>を基に、遺跡・遺構・遺物を項目に沿って整理し、今後の平泉研究の進展に繋げることを意図するものである。しかし、膨大な量になることから概略を記すにとどめ、参照報告書を示して検索の便宜を図った。

表1 平泉遺跡群発掘調査 地区別一覧<sup>3)</sup>

地区	主な遺跡	12世紀の遺跡			百分比
		遺跡数	調査次数	調査面積 ㎡	
中尊寺地区	中尊寺	1	82	11,896	7.7%
	その他	2	21	13,598	
	計	3	103	25,494	
柳之御所地区	柳之御所	1	74	76,535	23.7%
	その他	2	11	1,547	
	計	3	85	78,082	
中心地区	志羅山	1	105	28,186	25.4%
	泉屋	1	28	19,654	
	その他	12	157	35,947	
	計	14	290	83,787	
西部丘陵地区		6	16	3,320	1.0%
太田川南部地区		12	40	21,986	6.7%
南西部地区		1	8	420	0.1%
衣川北部地区		6	21	68,742	20.9%
北上川東部地区		8	14	47,802	14.5%
計		53	577	329,633	100%

## 2 年代観について

奥州藤原氏歴代の当主の没年は、初代清衡が1128年、二代基衡が1157年頃、三代秀衡が1187年、四代泰衡が1189年であり、当主の在位時期は、初代がおおよそ12世紀第1四半期、二代が第2四半期～第3四半期前葉、三代が第3四半期前葉～第4四半期中頃、泰衡が第4四半期中頃となる。

考古学からの年代観については、「7（2）かわらけ」の項で述べるが、平泉遺跡群の発掘調査において普遍的に出土し、かつ数量的にも十分なかかわらけの編年案は1990年代半ばから示されはじめた。以降、資料の増加とともに編年研究は進展をみせ、直近では井上雅孝氏が柳之御所遺跡堀内部地区の井戸状遺構出土の資料を多数用い、概ね12世紀の四半期区分に沿う4期区分の編年案を提示している（井上2009）。

報告書には編年作業が進む以前のものが多数あり、12世紀あるいは12世紀前半（代）・後半（代）と記述されているものも多い。以下では遺構・遺物が限られる前半（代）及び第1四半期については報告書等により記述するが、大多数、特に後半（代）については割愛する。

## 3 遺跡と地区別概要

### （1）概要

平泉町は北上川中流域の北上盆地に位置する。現在の市街地中心部は、東は北上川、西は南北に延びた関山丘陵、南は太田川、北は衣川に囲まれ、主要な遺跡はそれと重なって分布するが、開発に伴う発掘調査の増加によってそれらの境を越えた周辺部にも多くの遺跡が分布することが次第に分かってきた。平泉町教育委員会の2007年度版「平泉町遺跡分布図」には埋蔵文化財包蔵地として北上川

2) 平泉町教育委員会が平泉遺跡群の行政発掘調査を行うようになったのは1980年代である。毛越寺庭園整備に係る報告書が1981年から刊行されていたが、「岩手県平泉町文化財調査報告書」として第1集を刊行したのは1983年である。また、岩手県教育委員会・（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターもそれ

ぞれに報告書を刊行している。

3) 調査次数・面積とも、2014年3月末までに刊行された発掘調査報告書に記載されたものを加算したが、不明や記載のない場合、また未報告があることから、一部の遺跡は記載の調査次数・面積を上回る。

西地区（平泉）63遺跡、北上川東地区（長島）38遺跡、計101遺跡が掲載されている。内容や数量を問わなければ、発掘調査され12世紀の遺構・遺物が認められるのは、西地区40遺跡、東地区8遺跡、併せて48遺跡である。それに東地区の高館跡と衣川北岸の奥州市衣川区接待館遺跡ほか4遺跡を加えた53遺跡を平泉遺跡群<sup>4)</sup>として扱う。なお、記述の便宜上、遺跡が所在する地区を、中尊寺地区・柳之御所地区・中心地区、それらの周辺部を西部丘陵地区・太田川南部地区・南西部地区・衣川北部地区・北上川東部地区の計8地区に仮区分し、それぞれの遺跡数・調査回数・調査面積は表1、個別の遺跡位置は図1～4に載せた。

以下、地区別の概要を述べるが、寺院および柳之御所遺跡については「3・4」で個別に扱う。なお、遺跡名に付す「遺跡」あるいは「跡」は適宜省略している。また、遺構の名称は統一されたものではなく、柳之御所遺跡ほかで使用されている例をあげると、「50SE 1」の場合、「調査回数一遺構略号一遺構番号」の順になる。SEは井戸あるいは井戸状遺構、SKは土坑、SBは建物、SDは溝や堀、SGは池、SXはその他を示している。さらに、(報一)は参照報告書を示し、番号は表2報告書一覧の「報告書番号」に対応する。

### (2) 中尊寺地区

中尊寺跡及び中尊寺が建つ関山丘陵の東裾の坂下<sup>さかした</sup>、その丘陵を開析する桜川を挟んで南側に立地する衣関<sup>ころものせき</sup>の3遺跡が所在する。坂下遺跡10次は四面庇付を含む掘立柱建物・石敷道路・池状遺構ほかを検出(報65)。衣関遺跡1次は溝で区画された内部に掘立柱建物4棟、さらに塀で区画された1棟を発掘、後者は神社あるいはそれに類するものと推測された(報70)。5次は板塀とそれに並行する石敷遺構が検出されたが(報72)、小範囲のため、性格は明らかでない。

中尊寺について『吾妻鏡』は「寺塔四十余宇、禅房三百余宇也」と伝える。衣関には伝熊野堂跡等、特別史跡中尊寺境内の飛地指定地があるように、坂下とともに中尊寺と強い結びつきを持つ遺跡であることが遺構・遺物に見ることができる。

### (3) 柳之御所地区

柳之御所遺跡、それと北で接する丘陵の高館<sup>たかだち</sup>、西で接する猫間ヶ淵の3遺跡が所在する。高館跡3次は中腹から堀(報118)、5次は南西斜面地を調査し、区画施設と推測される溝(報119)を検出。猫間ヶ淵跡3次の溝からは瓦片ほか、多数の遺物が出土した(報123)。

高館3次堀の西側延長部分は2014年に調査された(74次。2014年現地説明会資料)。猫間ヶ淵は柳之御所と無量光院を隔てる低地であり、柳之御所の堀の一部はそこに掘り込まれている。



図2 遺跡位置図(1) 2.5万1地形図「平泉」  
 1中尊寺跡 2毛越寺跡 3観自在王院跡 4無量光院跡 5金鶏山遺跡  
 6坂下遺跡 7衣関遺跡 8柳之御所遺跡 9高館跡 10猫間ヶ淵跡  
 11花立I遺跡 12花立II遺跡 13白山社遺跡 14伽羅の御所跡  
 15鈴沢の池跡 16倉町遺跡 17志羅山遺跡 18泉屋遺跡 19国衡館跡  
 20高館跡 21鈴懸の森遺跡 22毛越I遺跡 23毛越II遺跡 24毛越V遺跡

4) 平泉遺跡群の呼称は平泉町教育委員会の報告書第6集(1985年)から使われている。

#### (4) 中心地区

平泉町市街地と重なる地区である。世界遺産である毛越寺・観自在王院跡・無量光院跡・金鷄山をはじめ、<sup>はなだて</sup>花立 I 遺跡ほか計14遺跡が所在し、多くの遺跡で調査が繰り返されてきた。特に志羅山遺跡と泉屋遺跡が広範囲に調査されているほか、花立 I が29次・花立 II 遺跡が23次・伽羅之御所跡が21次・国衡館跡が14次と調査次数を重ねている。

**金鷄山遺跡**の中心 金鷄山は標高98.6 m。経塚が頂上に築かれていたが、1930年に民間人により掘削され、渥美袈裟禪文壺や常滑三筋文壺・常滑甕・銅製経筒・石製外容器ほか多数の遺物が出土、現在は東京国立博物館ほかに所蔵されている(報61)。麓を小規模に発掘しているが、出土遺物は僅かである(報60・62)。**花立 I 遺跡**は花立山と呼ばれる丘陵を含む。4次は花立廃寺跡の北隣接地に礎石建物を検出した(報127)。柵列状ピット(7次。報130)や柱穴列(9次・報132ほか)のほか、15・16次(共に報133)・24次(報138)は区画溝と推測される一連の遺構が検出されている。9次は便所遺構、28・29次では陶器窯等3基の窯が発見された(報139・140)。**花立 II 遺跡**2・12次は同一の大溝(報143・147)、3次は木製品多数を含む井戸(報144)、4次は毛越寺軸線と一致する南北柱穴列(報145)、11次は観自在王院の北の境になると推測される溝(報147)を検出。13次は掘立柱建物を伴う池と12世紀前半の大量の瓦が出土した(平泉町教育委員会2000)。**白山社遺跡**は堀と土塁が残る。

3次は現境内前面に池と石積護岸・橋脚(報158)、4次は堀の北東隣接地に梵鐘鑄造遺構(平泉町文化財センター編2000)を検出した。**伽羅之御所跡**は三代秀衡・四代泰衡の常居所「加羅御所」(『吾妻鏡』)の擬定地。1次と2013年の22次は区画の大溝(報160・概報176)、2次は池の排水溝の可能性があるとされる遺構(報161)、5次は和鏡が埋納された井戸やトイレの可能性のある土坑(報164)、12・13次は泉屋から柳之御所へつながる南北道路Ⅲの側溝(共に報168)、16次は東西道路の側溝と推測された溝1条(報170)、20次は四面庇建物2棟(報174)が検出された。**鈴沢の池跡**は3次の調査のほか、志羅山35・52・88次等で調査され、整地層が一部に確認された(報199・203・211)。現代の区画整理により旧地形は埋没したが、台地を開析する東西に細長く大きな沢跡である。中心地区を南北に二分し、北は白山社・花立 II ・伽羅之御所、南は志羅山・泉屋の各遺跡に所在する。12世紀にはかなり埋没した状態の低地であったことが分かる。**倉町遺跡**は毛越寺の東、観自在王院の南に隣接する。1次で鍛冶遺構を発見(報180)。4次と8(・9)次調査は同形態・同規模の総柱の掘立柱建物1棟がそれぞれに検出され(報182・184)、『吾妻鏡』が記す「高屋」に相当すると推測された。また、それに伴う堀や東西道路の南側溝・周溝を伴う竪穴建物・多数の中国産青白磁・法勝寺系瓦が見つかるなど、重要な知見をもたらした。**志羅山遺跡**は毛越寺街路改修事業や一関遊水地事業に伴い県道毛越寺巖美線と国道4号の両側が連続的に調査され、道路遺構や屋敷地の区画溝・堀・掘立柱建物、井戸・井戸状遺構、土坑・汚物廃棄坑・池ほかの多くの遺構と豊富な遺物が発掘されている。**泉屋遺跡**も志羅山同様面的に発掘され、豊富な遺構・遺物が見つまっている。両遺跡については後述の個別の項目で多く触れる。**国衡館跡**は三代秀衡の嫡男国衡の居館とする伝承が残る。奥大道に沿い、平泉の中心地への出入り口となる南の要衝に位置する。2次は四面庇建物(報239)、7次は大型掘立柱建物の一部、9次は大規模掘立柱建物と推測される1棟(共に報242)、12次は区画が分かる小規模な堀(報243)、14次は堀と鍛冶遺構(報245)が検出された。**高衡館跡**は国衡館の南に隣接する。1次の調査が行われただけで12世紀の遺構・遺物は報告されていないが、調査が進めば見つかることが予想される。

12世紀の平泉の中心だった地区であるが、初代清衡期の遺構・遺物は希薄で、中心地区北部に検

出された花立Ⅰの陶器窯が確実な例としてあるにすぎない。毛越寺・観自在王院の創建は12世紀中葉とされ、同時に毛越寺周辺の開発が進められたと考えられるが、多くの遺構・遺物は後半代、おおむね三代秀衡期に属するものである。中心地区を南北に二分する鈴沢の池跡の南側の志羅山と泉屋がある程度の面的な広がりの中で遺構が把握できるのに対し、北側の花立Ⅰや花立Ⅱは点的な調査が多く、個別には重要と思われる遺構も相互の関係の把握が難しい現状がある。

#### (5) 西部丘陵地区

西部丘陵地区としたのは中心地区の西側にあつて、中尊寺が建つ関山丘陵から南へ連なる低平な丘陵一帯である。6遺跡が所在する。

金鷄山の西山麓と谷を隔てて向かい合う鈴懸の森遺跡1次はかわらけ片の包含層が標高77m±と高い地点の斜面部に見つかった(報247)。毛越寺南方の毛越Ⅰ遺跡は国衡館・高衡館と県道を挟んで向かい合う舌状台地に立地、東北自動車道に伴う1973・74年の調査は明確な12世紀の遺構は報告されていないが、各種の遺物多数が出土した(報248)。毛越Ⅱ遺跡は5次の調査が行われ、土坑や溝・柱穴・整地層とそれらに伴う遺物(報250～252)、毛越Ⅴ遺跡は複数の調査次で土坑等が見つかり、中でも1次は掘立柱建物や柱穴列・土坑・溝と遺物が発掘された(報253)。毛越Ⅵ遺跡は1次の調査だけであり、かわらけ片と中国産青白磁が出土(報258)、さらに南、毛越寺から南西1.9kmの善阿弥遺跡は、現在のところ、発掘調査によって遺物が確認された当該地区西端になる。

『吾妻鏡』は毛越寺について「堂塔四十余宇、禅房五百余宇也」と記すが、それらは毛越地区にも建っていたと思われる。護摩堂跡や吉祥堂跡ほか毛越寺の飛地指定地があり、現在、毛越地区に集合する毛越寺13支院のうち、普賢院など6支院は19世紀初め以前から同地に所在した。遺構密度が高い地点があることや遺物が広範囲から出土することは「堂塔」「禅房」のあり方に関連するのであろう。

#### (6) 太田川南部地区

中心地区の南を限る太田川の南部は南北方向に延びる国道4号の東側に沖積地と沖積微高地、西側に低位段丘が広がる。現在まで12遺跡が調査されている。樋渡遺跡は溝を調査(報259)。祇園Ⅱ遺跡7次は、現在八坂神社が建つ「祇園社」(『吾妻鏡』)擬定地の北西部を調査、四面庇掘立柱建物が検出された(報263)。5・13次で12世紀と推測される溝が検出されているものの(報262・266)、全般に遺物は少ない。祇園Ⅰ遺跡1次は大型の掘立柱建物を検出した(報268)。三日町Ⅲ遺跡は国道4号を挟んで八坂神社の東向かいにある「王子諸社」(『吾妻鏡』)擬定地を含む。1次の溝2条は道路遺構の側溝と推測されたが(報269)、他に12世紀の遺構はなく、全般に遺物も僅少である。三日町Ⅱ遺跡3次は2次検出の12世紀の道路側溝の続きを調査した(報275)。全般に遺物は僅少である。三日町Ⅰ遺跡2次は掘立柱建物について12世紀から中世の可能性があるとするが(報279)、推測の域を出ず、全般に遺物も僅少である。高玉遺跡3次はトレンチにより2,040㎡を調査。掘立柱建物と溝・土坑が見つかり、7,000点超のかわらけ片をはじめ遺物も多い(報281)。佐野原遺跡2次はかわらけ細片と国産陶器が僅少出土(報283)。高田遺跡1次は12世紀のものを含む掘立柱建物や土坑・溝が報告され(報284)、佐野遺跡はかわらけ片と国産陶器が僅少出土している(報290・291)。宿遺跡1次調査区は柳之御所遺跡から南3kmである。掘立柱建物とかかわり埋設土坑10基のほか、12世紀前半代の常滑片1点が出土(報292)。4次は1次の南方300m地点を調査、四面庇掘立柱建物1棟は12世紀と推測された(報294)。現在のところ、遺構が検出された当該地区の南限になる。

当地区は南北に遺跡が連続するものの、遺構・遺物は点的な分布で数量も少ない。ただ、「祇園社」や「王子諸社」の擬定地があり、周辺に祇園Ⅰや祇園Ⅱの四面庇建物が検出されたように、2社の中

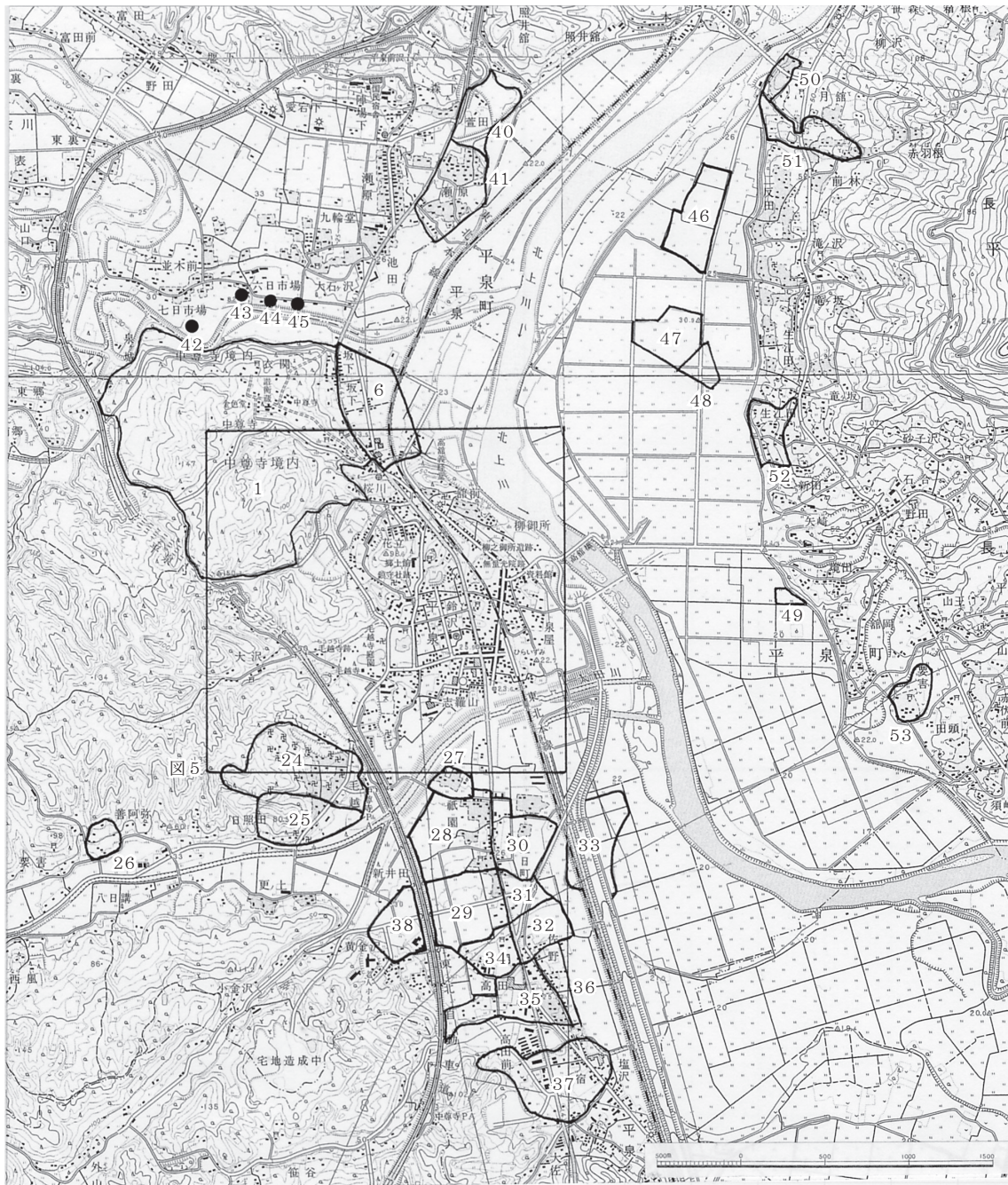


図3 遺跡位置図(2) 2.5万分1地形図「古戸」「前沢」「平泉」「一関」縮小  
 1中尊寺 6坂下遺跡 24毛越V遺跡 25毛越VI遺跡 26善阿弥遺跡 27樋渡遺跡 28祇園II遺跡 29祇園I遺跡 30三日町  
 III遺跡 31三日町II遺跡 32三日町I遺跡 33高玉遺跡 34佐野原遺跡 35高田遺跡 36佐野遺跡 37宿遺跡 38片岡II遺  
 跡 40瀬原I遺跡 41瀬原II遺跡 42衣の関道遺跡 43接待館遺跡 44細田遺跡 45六日市場遺跡 46里遺跡 47本町II遺  
 跡 48畑中遺跡 49下構遺跡 50月館I遺跡 51新山権現社遺跡 52佐藤屋敷跡 53小島館跡

心に「都市平泉」の南部地区が形成されていたことが考えられる。また、高玉は居住域が沖積微高地  
 へ広がっていたことを示している

### (7) 南西部地区

毛越寺から西南西4.5kmの<sup>たっこせいこうじ</sup>達谷西光寺<sup>たっこせいこうじ</sup>を仮称した。西光寺跡以外に2遺跡が分布する。内1遺  
 跡1次の小面積の調査が行われたが、遺構・遺物は見つからなかった。

西光寺は奥大道沿い建つ寺院で、『吾妻鏡』にその名がみえる。西光寺境内や周辺には12世紀の遺構や遺物が埋蔵されている可能性がある。

#### (8) 衣川北部地区

衣川の北、瀬原地区の瀬原Ⅰと瀬原Ⅱの2遺跡、行政区分では奥州市衣川区に所在する衣川北岸の接待館ほか4遺跡が所在する。

瀬原Ⅰ遺跡が北、瀬原Ⅱ遺跡が南に接して並ぶ。12世紀のかわらけや国産陶器・中国産磁器少量が散在するが、遺構は瀬原Ⅰ5次の12世紀前葉金剛院下層相当のかわらけを伴う土



図4 西光寺跡 2.5万分1地形図「平泉」

坑1基が確認されているにすぎない(報302)。瀬原Ⅱ9次では僅少の12世紀の国産陶器出土地点周辺の掘立柱建物の一部がそれに伴うだろうとされる(報307)。接待館ほか4遺跡の調査は衣川左岸築堤工事に伴うもの。衣の関道遺跡は沖積微高地に立地。「池状遺構」と「テラス状遺構」が注目され、「池状遺構」について、1次報告は園池と考えたのに対し、2次報告は外縁を区画する施設の一つとする見解を示した(報309)。接待館・細田・六日市場の3遺跡は低位段丘縁に西から東へ順に並ぶ。接待館遺跡は外郭が堀SD1に囲まれ、その外には土塁が残る。内部は現状が「コ」字形の堀SD3で区画される(報310)。細田遺跡は12世紀後半の四面庇掘立柱建物1棟のほか、12世紀後半以降とされた掘立柱建物多数と土坑など(報311)、六日市場遺跡は一連の遺跡の東端を区画する南北方向及び北東―南西方向の近接する堀2条(報312)が検出された。以上の3遺跡の12世紀の遺構・遺物は後半代を主とするが、接待館と六日市場では12世紀第一四半期および前半代のみが出土している。

瀬原Ⅰ・瀬原Ⅱは併せて15次24,752㎡と広い範囲が調査されているが、立地条件が良いにもかかわらず12世紀の痕跡が希薄である。一方、接待館は2005年の調査終了後に現状保存が決まり、遺構の多くが精査途中あるいは未掘の状態でも中断され、遺跡の評価は将来へ持ち越されることとなったが、SD3への大量のかわらけの廃棄パターンが柳之御所堀内部地区と共通するなど、衣川北岸の遺跡の重要性を考古学的に示した意義は大きい。周辺には多くの遺跡が埋蔵されていると推測でき、本地区の様相が考古学的に明らかされ衣川以南の地区との対比が可能になれば平泉研究は大きく進展するであろう。

#### (9) 北上川東部地区

広い沖積地に形成された微高地に里・本町Ⅱ・畑中・下構、丘陵前面に付着した河岸段丘等に月館Ⅰ・新山権現社・佐藤屋敷・小島館の8遺跡が立地する。

里遺跡はトレンチにより4,160㎡を調査。遺構は井戸・土坑・溝、遺物はかわらけ片・国産陶器・中国産磁器ほかと溝SD1から和鏡が出土(報313)。本町Ⅱ遺跡2次は26,157㎡を調査、約2,000㎡を囲う2号周溝の内側に検出された墓壇群45基は12世紀後半のものを含み、かわらけ・国産陶器・中国産白磁少量が出土した(報314)。畑中遺跡1次(報315)・下構遺跡2次(報316)はかわらけ・国産陶器・中国産磁器が僅少出土した。月館Ⅰ遺跡2次は調査面積24㎡から摩耗したかわらけ細片約150点を発掘(報317)、隣接する新山権現社遺跡2・3次では手づくねかわらけ片と中国産白磁碗片(報318・319)、佐藤屋敷遺跡2次は常滑三筋文壺と中国産磁器(報321)が僅少出土した。柳之御所南東2.6kmに位置し、かわらけ5片が報告された小島館跡(報322)が当該地区で確認された南東端の遺跡になる。

本地区の遺構・遺物は概ね12世紀後半代に属するが、ロクロかわらけが里と下構、ロクロ柱状高台1点が月館Ⅰ、凸帯がめぐる渥美袈裟襷文四耳壺が本町Ⅱに僅少なから認められることから、前半代にも一定程度の広がりをもって土地利用されていたことが分かる。

## 4 寺院及び関連調査

### (1) 概要

戦後の発掘調査は、岩手県教育委員会が1950年に花立遺址（後に花立廃寺跡と改称）、文化財保護委員会が1952年に無量光院、藤島亥治郎氏を中心とする平泉遺跡調査会が1954年～58年に毛越寺と観自在王院、引き続いて1959年～68年には中尊寺を学術調査した。その後、庭園整備を目的にした調査が1972年～77年に観自在王院、1980年～91年に毛越寺で行われ、その成果に基づいた復元整備が行われた。整備目的の調査は無量光院でも2002年から始まり、現在も継続されている。また、中尊寺ではⅡ期にわたる内容確認調査が1996年～2011年に実施された。いずれも調査主体は平泉町教育委員会である。

以上の寺院は中尊寺地区と中心地区に所在する。それらとは距離的に離れている西光寺も複数次に及ぶ調査が行われている。

### (2) 花立廃寺跡

毛越寺附指定地で、現在は花立Ⅰ遺跡に含めている。桁行7間、梁行4間の礎石建物で、梁行2間の側廊が左右5間ずつ、さらにその先に翼廊が延びるという特異な形式をとる（報126）。『吾妻鏡』文治5年9月17日条「一 鎮守事」に「西方北野天神、金峰山」の記事があり、一帯は安永4年『安永風土記書上』などに金峯山社と記され、伝承されてきた。その見解に立って報告されたが、異論もあり、遺構の評価は現在も定まっていない。

花立廃寺跡の北80m地点は花立Ⅰ4次で調査され、礎石建物1棟は花立廃寺と関連すると推測された（報127）。花立廃寺跡より標高で6mほど低い南150m地点の花立Ⅱ13次で調査され、12世紀後半代の池などの遺構のほか、12世紀前半、一部は第1四半期とも指摘される2,000点超の唐草文・蓮華文系の瓦片が出土した（平泉町教育委員会2000）。その供給源の解明が課題であろう。

### (3) 中尊寺跡

1953年の1次以来、発掘調査は82次を数える。平泉遺跡調査会の学術調査は、山上の伝金堂跡・伝三重池跡地区、伝多宝塔跡地区、それより一段低い伝大池跡地区の3カ所を調査した（報1）。1996年51次からの内容確認調査については回数ごとの報告書のほか、69次までの分が別に刊行されている（報16）。

大池については次の点が明らかになっている。①12世紀前葉の清衡期に造られ、後葉の秀衡期に改修されて規模を縮小していることが池を覆う整地層や池堆積層・堤塘の調査で判明（55・59・64・79・82次。報8・9・11・16・22・23）、②導水目的の貯水施設及び導水溝の一部を検出（54・67・69次。報7・13・14・16）、③中島は旧表土へ盛土構築していることを再確認（77・79次。報21・22）、④ハスの花托や種子が古期・新期それぞれから出土（64・82次。報11・16・23）などである。

金剛院境内の40次は多数の木製品などと共にロクロかわらけが出土（報4）。平泉のかわらけ編年上、第1四半期の指標となる一群であり、大池古期の池底からも出土した（64次。報11・16）。54次の貯水施設から出土した多数の小皿（報7・16）も第1四半期に属するであろう。51次は金色堂



正面に向かう石敷道路（報6・16）、南東約200mの現参道月見坂の南斜面平場の61次Ⅱ期は側溝と見切りの縁石を伴う石敷道路（報11）を検出、直線では繋がらないが、同一の遺構と推測される。それと直接の関係は不明であるが、北東約400mの坂下10次では南北方向の石敷道路が検出された（報65）。石敷道路は無量光院の北土塁の外にも検出されており（8次。報43）、平泉の場合、寺院固有の施設の可能性がある。また、中尊寺創建以前と推測される大溝1条も重要であろう。金色堂そばの17次大溝SD10は上幅4.0m（報2）、上幅3.5mの50次Ⅱ期の大溝は11世紀後半を中心とする時期とされた（及川2012）。同類の遺構は月見坂入口の56次でも検出されている。

#### （4）毛越寺跡

平泉遺跡調査会は金堂円隆寺・嘉祥寺・講堂・常行堂・南大門・庭園・橋脚ほかを調査した（報29）。

その後の庭園整備目的の調査は回数ごとの報告書と総括報告書が刊行された（報25～36）。主だった成果は次のとおりである。①伝舟入地区に小さな中島があることが判明（4次。報27・36）、②中島や築山・護岸石敷面・排水路のあり方などから、池及び中島は改修・拡大され、新旧2期があることが判明（4・12・13次。報27・34～36）、③円隆寺の東に検出した遺水のほぼ全容を明らかにしたこと（4・6・9次。報27・29・31・36）、④東門とそこから内部に伸びる通路を検出（3・5次。報26・28・36）、⑤西岸に入り江状遺構を確認（11次。報33・36）、⑥嘉勝寺東廊先端部に新たに2間3個の柱穴を検出し、それらが石敷面を切っていることなどから、嘉勝寺は円隆寺より後に建てられたと考察（11次。報33・36）、⑦円隆寺前面に礎遺構を検出、出土かわらけから12世紀第3四半期後半～第4四半期前半の構築と推測（7次。報30・36）などである。

8・10次は本堂建て替えに伴う調査で、全面に及ぶ石敷を南大門跡外方に検出した（報32）。

#### （5）観自在王院跡

平泉遺跡調査会は大阿弥陀堂跡・小阿弥陀堂跡・南門跡・庭園跡ほかを調査した（報37）。

その後の史跡整備目的の調査では次の点が明らかになった（報38）。①西を限る土塁（築地）の基底部と毛越寺と向かい合う西門を検出したこと、②遺水は毛越寺境内の北東隅にある弁天池を水源すること、③毛越寺との間は北が弁天池に遮られて東西30m幅の通路になる（通路状広場）こと、④桁行10間×梁行2間、総柱の掘立柱建物1棟を西土塁南西部に接して検出したことなどである。

④の建物は、『吾妻鏡』文治5年9月17日条の「車宿」に相当すると推測された。観自在王院跡の北と東を限る施設は未検出であったが、花立Ⅱ11次は北側の町道に沿って調査、東西方向の2号溝は軸線や位置から観自在王院の北を限る施設と推測された（報147）。

#### （6）无量光院跡

文化財保護委員会の調査は西島の中堂、東島の3棟の礎石建物が中心で、庭園は推定される池部分へ小トレンチを開けただけであった（報39）。

2002年からの復元整備に伴う調査により、次のことが明らかになっている。①北小島を検出し、それと西島とを結ぶ橋を確認（17次。報50）、②導水溝およびそれに伴う落ち込みを検出（18・19次。報51・52）、③池の東岸と東島を繋ぐ橋が想定位置には存在しないこと。また、池の規模は東西約140m、南北140m以上と判明（22次。報55）、④西島と東島の間にも橋はなく、池中へ張り出した舞台を中堂正面に検出（23次。報56）、⑤基壇下に无量光院以前の遺構となる2列に並ぶ板石を検出（24次。報57）、⑥北岸に入江と岬を検出（25次。報58）、⑦東島3棟の礎石建物の北半分を再調査し、東方建物は総柱礎石建物と別な建物とで構成され、さらにそれ以前に構築された掘立柱建物1棟の存在を確認（25次。報58）などである。

『吾妻鏡』文治5年9月17日条は無量光院について「悉以所レ摸二字治平等院一也」と記すが、北小島とそれに伴う橋・北岸の入江を検出したことはそれをさらに裏付けることになる。舞台は3×3間の総柱の掘立柱建物で中堂正面に造られている。三代秀衡の浄土観が反映された遺構と言えよう。1992年以降、史跡指定地外の行政発掘調査も次数を重ねてきた。その結果、①池の北汀付近を発掘（3次。報40）、②西土塁と北土塁は繋がっていたことや土塁の構築年代を12世紀代3四半期後半から第4四半期前半と推測、また、井戸状遺構を転用したトイレ状遺構から多数のチュウ木が出土（4次。報41）、③東土塁の基底部と推測される整地地業層、猫間ヶ淵に面した張り出し部に向かうと見られる道路を確認（5次。報42）、④周溝に囲まれた竪穴建物と相輪塔あるいは宝樹が立てられたと推測される特殊遺構を検出（7・9次。報42・43）、⑤北土塁の北側の犬走り状部分に幅1.5mの石敷道路を検出（8次。報43）、⑥7・9次同様、周溝で囲まれた竪穴建物を調査（21次。報54）、⑦池北東部に排水溝の一部を確認（26次。概報59）など、遺跡の範囲の確定や構造・時期を推測する多くの成果があった。

④の周溝を伴う竪穴建物は、特殊遺構と同時存在の可能性があること、離れて⑥があること、倉町4次で同種の遺構が見つまっていること（報184）と併せてその機能を考える必要がある。なお、境内四周のうち、想定南辺近くでは14次調査が行われたが、土塁や堀は未確認である（報47）。また、2012年の26次は北東部に排水溝の一部（概報59）、同年の花立Ⅱ24次は西辺の堀の一部（概報154）を初めて確認した。

### （7）西光寺跡

西光寺境内には世界遺産への追加登録を目指す達谷窟がある。2次は毘沙門堂と現在の蝦蟇が池の間をトレンチで調査、埋蔵された園池の石積護岸と大量のかわらけの出土を確認した（報297）。急勾配の石積護岸は中尊寺伝三重池や白山社の池に類似する。7次で検出された石敷遺構と落込みは時期等の詳細は不明であるが（報299）、2次検出の園池と関連する可能性も考えられる。

『吾妻鏡』文治5年9月28日の記事は平泉を滅ぼし鎌倉へ帰還する源頼朝が「田谷窟」に立ち寄ったことを伝える。奥大道沿いの要衝を占め、広義の「都市平泉」の西の境界に営まれた有力寺院であったと推測されるが、奥州藤原氏との関係は明らかでない。

## 5 柳之御所遺跡の調査

### （1）概要

平泉遺跡調査会によって1969～72年に1次～10次の学術調査が行われた。その後、一関遊水地・平泉バイパス建設事業が計画され、1982年から3カ年の範囲確認調査（11～17次。報74～76）、1988～93年に行政発掘調査が実施され、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが遺跡南東半を6次28,800㎡（21・23・28・31・36・41次：報89）、平泉町教育委員会が北西半を6次7,630㎡（24・25・27・29・30・35次：報80・82・83・85・86）の調査を行った。その結果、北西～南東長約870m、最大幅200mと細長い遺跡は堀に囲まれた南東半の堀内部地区（埋蔵文化財センター調査区を含む）とその北西半の堀外部地区（町教育委員会調査区を含む）に二分され、遺構や遺物の様相から性格の違いが明らかになった。以下の記述は、堀内部地区を堀内部、堀外部地区を堀外部と省略する。

### （2）堀・橋

遺跡主体部より2.2m低く、沖積地との間に狭く残された南端に検出された堀21SD 1は開口部幅

が8.0～13.7m、深さが2.2～4.6m、断面形がほぼ逆台形である。また、その外側に埋められた状態の橋脚の一部が見つかり、別な堀1条が存在することが確認された。23次は台地東縁に沿う21SD1を追跡し、北端が沖積地との境で終わっていることを確認した（報89）。

堀は、その後、38・39次（共に報88）・56・69・70次（報101・110・112）・72～74次（報114～116）と調査が続けられた。南端に確認された二重の堀は全体にわたって並行して検出され、堀北西端が北上川と接する崖まで延びていること、堀に新旧関係があって外側の堀（21SD2・72SD2ほかの名称）が内側の堀（21SD1・72SD1ほか）に先行することを明らかにした。74次報告は、外堀が12世紀前半に構築され後半に埋戻されていること、内堀が第4四半期まで開口していたことを指摘している（報116）。また、内堀に架かる橋の橋脚が3地点で検出され（21・23・41次。報89）、南端の橋21SX35は泉屋を起点として伽羅之御所を通る南北道路Ⅲと柳之御所堀内部に検出された道路状遺構21SC1を繋ぐものである。

### （3）堀内部

岩手県教育委員会は1992年から範囲・内容確認調査に着手、1997年の国史跡指定後は、堀および堀内部を対象に整備等を目的にした調査を継続、2014年は76次調査を実施した。回数ごとの発掘調査概報のほか、第1次及び第2次整備事業のうち、50・52・55・56次については内容確認調査総括報告書（報102）が刊行された。2003年の57次以降、2008年の69次までは中心域や園池・堀等の再調査・追加調査が主となり、バイパス等関連調査時の遺構の一部の報告は修正されている（報101・103・105・106・108・109）。特に園池23SG1は大幅な見直しが行われると共に、無量光院と金鶏山山頂に向いた池に架かる橋や修羅が新たに発掘された（共に報105）。なお、掘立柱建物と井戸（状遺構）及びかわらけを基礎資料として遺構群の変遷と年代観が考察され、検討の過程と結果は5回にわたって報告されている<sup>5)</sup>。

バイパス等関連調査時の報告は12世紀後半代、三代秀衡・四代泰衡期の遺跡としたが、52SE10一括出土のかわらけにより（報96）、遺跡の利用開始が第1四半期、初代清衡期までさかのぼることが明らかになった。柳之御所の内でも、『吾妻鏡』に記された「平泉館」に該当する可能性が高い地区である。

### （4）堀外部

バイパス等関連調査は西端が高館跡との境、東端が堀内部との間にある一段低い面との境までの東西に細長い調査区で行われた。東西道路が調査区南端に検出され、その北側が主に調査された。区画溝と掘立柱建物や井戸・土坑・整地層などから、無区画期→小区画期→大区画期と3時期の変遷があり、小区画期には東西に4区画が並ぶと考えられた。道路は中尊寺方面へ向かい、両者を繋ぐものと推測される。なお、遺跡の年代観は堀内部同様、12世紀後半代とされていたが、12世紀第1四半期に位置づけできるかわらけの柱状高台や小皿が高館寄りの地点から一定数量が出土しており、当該期についての検討が必要であろう。

小規模な行政発掘も多く行われている。南東端の18次調査はチュウ木を出土する土坑が初めて見つかり（報77）、53次は井戸祭祀に伴うと考えられる中国産青白磁輪花碗などが出土した（報99）。

5) いずれも岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課柳之御所班（担当）著。なお、副題は共通のため②以下は省略、岩手県教育委員会編集・発行の掲載誌『平泉文化研究年報』は『年報』と略記。

①「柳之御所遺跡中心域における遺構の変遷（中間報告）～史跡整備計画との関わりを中心に～」、『年報』、第5号、2005年。

②「柳之御所遺跡中心域における遺構の変遷（中間報告 その

2)」。『年報』、第6号、2006年。③「柳之御所遺跡の検討（中間報告 その3)」。『年報』、第7号、2007年。④「柳之御所遺跡堀内部地区の遺構変遷（中間報告 その4)」。『年報』、第8号、2008年。⑤「柳之御所遺跡堀内部地区の建物復元（中間報告その5)」。『年報』、第9号、2009年。

## 6 道路遺構・区画施設

### (1) 概要

発掘調査により道路遺構を把握できるようになったことは大きな成果の一つである。平泉の場合、中尊寺・坂下の石敷道路、無量光院の石敷道路と道路、いわゆる波板状凹凸が検出された志羅山78次(報207)・細田(報311)以外は道路側溝によって認識される。その場合でも両側溝が並行して存在して路面幅まで分かる例は限られ、どちらか一方の側溝により道路遺構とされる場合が多い。

道路遺構は柳之御所堀内部・外部の両地区、中心地区は県道平泉巖美線や国道4号沿いを細長く調査した志羅山・伽羅之御所・泉屋、太田川南部地区三日町Ⅲ・三日町Ⅱで見ついている。中でも、志羅山46・66・74次では両側溝を伴った南北道路が長い距離にわたって調査され、調査担当の羽柴直人氏は平泉中心地区南半の道路遺構について考察し(報204)、その後、6期区分による道路遺構と中心地区の変遷案を示した(羽柴2002)。

### (2) 東西道路(図1)

東西道路は南側溝が倉町7次で西端(報184)、約525m東の志羅山66SD10・17・同84次でその延長(報204・210)が確認され、泉屋3次4号溝(報224)がその東端と推測でき、総延長は820mになる。途中の志羅山34次2号溝(報200)もその一部かもしれない。対応する北側溝として倉町と県道を挟んで向かい合う観自在王院南門の外側に沿って図示された東西溝を想定する考えもあるが、現段階では東への延長が確認できない。観自在王院東の志羅山47次20区(報208)や同32次(報201)・26次(報196)ほかで検出された一連の溝が対応する北側溝の可能性があると同時に、観自在王院の東隣に存在が推測されている方形大区画(本澤1993)の南辺になるとも考えられる。

### (3) 南北道路(図1)

白山神社参道から旧平泉町役場方面への町道は12世紀の古道の可能性が早くから指摘されていた。白山社3次では池中と推測される個所から橋脚を検出(報157)、その南西部の町道沿いの志羅山37次1号溝は橋脚の延長上にある道路の東側溝と推測され(報201)、さらに南約45m地点まで調査されている(報208・図6)。これを南北道路Ⅰとしておく。

南北道路Ⅱとしたものは、太田川に面した志羅山南端14次調査区(報195)から北へ延び、同66・74次で検出され(共に報204)、東西道路と交差した後はやや東へ角度を変えて北に延びて平泉駅前の県道を超えた同80次調査区(報208)まで総延長約300mを確認できる。東西道路との交差点の南側を便宜上ⅡA、北側をⅡBとする。ⅡAは東西両側溝が対で検出された部分が多いが、側溝は造り替えや浚渫が行われて重複が見られ、地点により道幅に違いがあると共にいくぶん蛇行する。74次B地区付近では路面幅が5～7m、側溝を含めると8～11mである。ⅡBは東西道路と直接交差する地点は確認できなかったが、西側溝は同66次で確認、それより北側は同69・76・78次(報205・206・207)、さらに県道を超えた80次北端まで両側溝が追跡でき、延長約100mになる。80次では新旧2期が確認され、溝底中心間が古期10.1m、新期8.5mとなる。

南北道路Ⅲは太田川に面した南端の泉屋から北東へ延び、伽羅之御所を通過して柳之御所堀内部南端の堀を跨いだ橋21SX35(報89)へと辿ることができる。南端は泉屋13次の西側溝(報231)、同16次で東側溝と思われる一部を検出(報233)、その北の泉屋25次は主軸方位がわずかに異なる溝2条が並行して検出され、東西の側溝と推測された(報235)。溝底中心間距離は21.5～23.5m。その先は鈴沢の池跡の東端にあたる低地を跨ぎ、伽羅之御所12次は西側溝、同13次は東側溝を検出したが(共に報168)、そこから北側の調査歴はない。

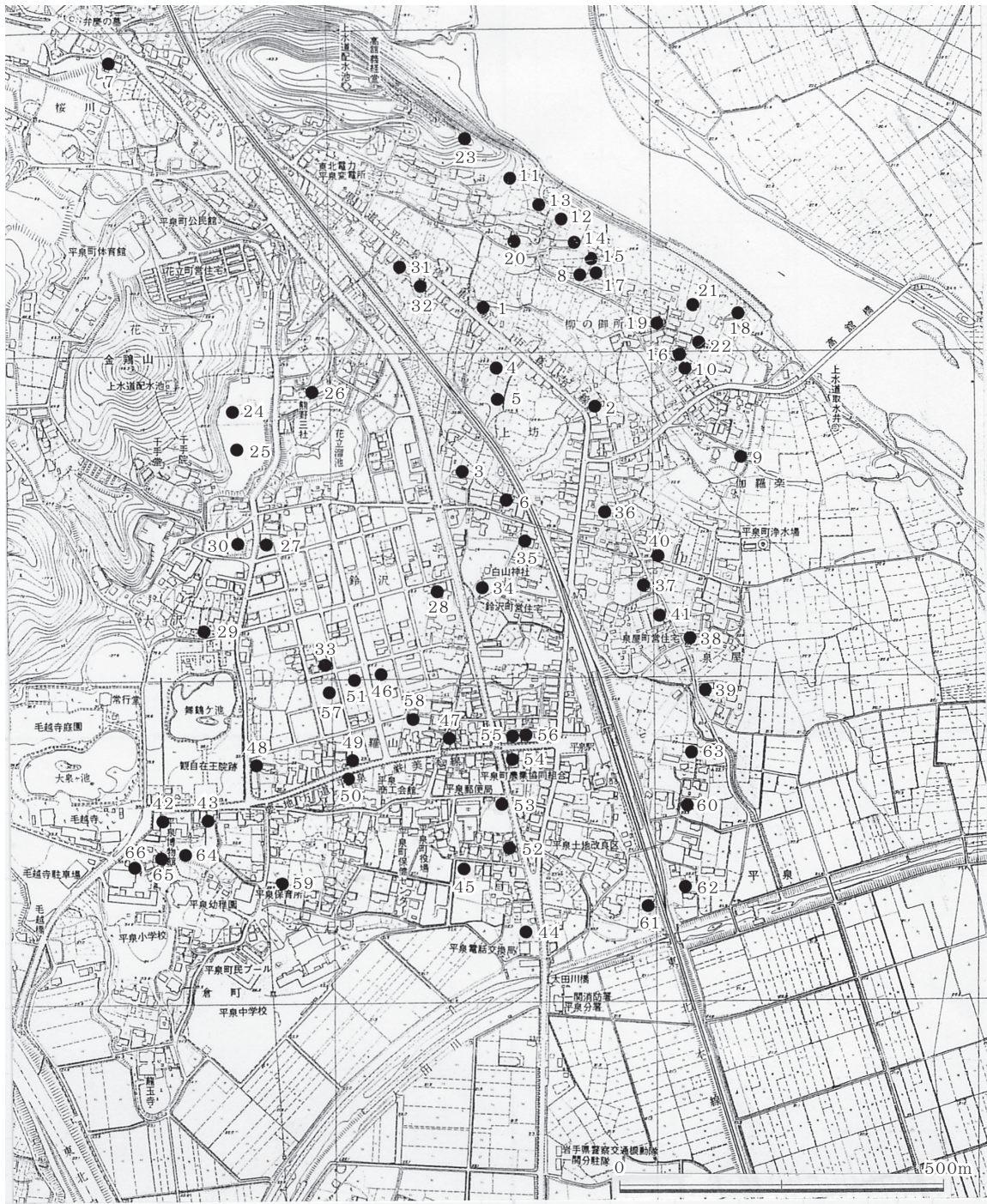


図5 柳の御所地区・中心地区の主な調査地点 (1984年「平泉町都市計画図」使用)

1～6無量光院 (1:4次 2:5次 3:7・9次 4:17次 5:21次 6:23次)・7衣関1次・8～22柳の御所 (8:18次 9:21SX35 10:23SG 1 11:24次 12:25次 13:27次 14:29次 15:30次 16:31SB 2 17:35次 18:50次 19:52次 20:53次 21:55SB 6 22:55SX 2)・23高館3次・24～26花立I (24:4次・25:花立庵寺・26:28・29次)・27～33花立II (27:2次 28:3次 29:11次 30:13次 31:15次 32:16次 33:鈴沢瓦窯)・34・35白山社 (34:3次 35:4次)・36～41伽羅之御所 (36:1次 37:5次 38:12次 39:13次 40:16次 41:20次)・42・43倉町 (42:4・7次 43:8・9次)・44～59志羅山 (44:14次 45:21次 46:35次 47:37次 48:42次 49:47次12区 50:47次13区 51:52次 52:66次1号池 53:66SD10 54:69次 55:77次 56:80次 57:88次 58:98次 59:102次)・60～63泉屋 (60:3次 61:13次 62:16次 63:25次)・64～66国衡館 (64:2次 65:7次 66:9次)

#### (4) その他の道路遺構

伽羅之御所16次は町道に沿う道路側溝を調査、町道が12世紀の古道を踏襲していることが明らかになったとする(報170)。太田川南部地区では三日町Ⅲ1次の並行する溝2条が「王子諸社」と「祇園社」擬定地をつなぐ東西道路の両側溝と推測された(報269)。その場合、路面幅は5.3m前後になる。また三日町Ⅱ3次は2次検出の道路側溝の一部を確認した(報275)。

#### (5) 区画施設

##### a 溝・堀

花立Ⅰ15次1号溝は上幅3.2m、南東75mの同16次1号溝は上幅1.2～2mの大溝である(共に報133)。同24次溝(報138)と共に方形区画施設の可能性がある。花立Ⅱ2次で検出された上幅4.5mの大溝は隣接する同12次でも確認(報143・147)、性格は明らかではないが、毛越寺9次の大溝(報31・36)と関連する可能性も考えられる。いずれも鈴沢の池の北に存在する。花立Ⅰ・花立Ⅱは大溝のほか、柵列・柱穴列なども検出されているが、点的であり遺構相互の関係の把握が困難である。伽羅之御所1次の上幅2.1～2.8mの大溝は22次で南側延長部が調査された(報160・概報176)。「伽羅御所」(『吾妻鏡』)擬定地の区画に係る重要な遺構である。志羅山47次12区1号溝と46区1号溝は県道毛越寺厳美線を挟んで検出された同一の溝で(報208)、観自在王院東に並んでいると想定された方形大区画(本澤1993)の東辺であろう。対応する西辺は同42次の南北溝(報208・図6)、南辺は同26次・46次(報196・208)ほか検出の溝がその一部になり、北辺は未確認である。東西の溝底中心間は135mを測る。

##### b 塀

柳之御所の報告書は57次までに検出された堀内部の柵と塀を概観し、柵3条、板塀5条、塀4条、柱穴列4条とした(報102)。柵状の塀23SA1は42mの南辺と22mの東辺が確認でき、それぞれ西及び北へさらに延びていたと考えられるが、削平等により失われている。園池23SG1とそれに伴う中心建物群と一体の遺構である。

志羅山では多くの調査で板塀が見つまっている。東西方向の一辺が検出された21次塀は板56枚が残り、板を布掘りの溝に打ち込む構造がよく分かる(報193)。板が残る例は73・77次にもある(報208・207)。板は残らないが、その痕跡を示すものや細い溝から板塀と判断される中に道路側溝に沿うものがあり、屋敷地のあり方を示している。志羅山66・74次では南北道路ⅡAの西側溝に沿って断続的ながら長い距離にわたって検出されている(報204)。同69次1号塀は南北道路ⅡBの西側溝に並行し、塀2条が直交する(報205)。近接の調査区の塀と併せ、北東-南西方向が約32.5mの区画が推測でき、内側の掘立柱建物や井戸・土坑が伴うであろう。伽羅之御所12次は南北道路Ⅲの西側溝に沿う板塀と内側に掘立柱建物が確認できる(報168)。倉町4・8次は4次1号建物に伴う塀の北辺と西辺を検出した(報182・184)。そのほか、志羅山18・22次(報192・194)、花立Ⅰ6・7次(報128・129)、花立Ⅱ2次(報143)・泉屋24次(報235)・衣関5次(報72)などで板塀が検出され、志羅山18・22次、泉屋24次例は区画溝、衣関5次例は石敷遺構に並行する。国衡館12次の塀は東西17.5m、南北は東辺10.5mまで、南辺以外の3辺を概ね確認できた(報243)。間隔が不揃いであるが、掘方には柱穴が認められる。ただし、時期決定資料を欠く。

##### c 柱穴列・柵列

柱穴列や柵列は柳之御所・志羅山・花立Ⅰ・花立Ⅱで確認されている。

平泉駅北西の志羅山70次を起点とする柱穴列2条は南北約10m間隔を保って併行して西へ延びる。同83次(報210)ほか計10次の調査区で確認、現時点の西端は同98次で検出され(報216)、

起点からの延長は175mである。角材か丸材を並べた柵列で、継続的に造りかえられた12世紀の遺構と推測される。近世の古絵図に記された「馬場」と重なる位置にある。志羅山94次・同102次の方形の掘り込み列は東西方向に延び、現時点で延長32mを確認できる（報214・219）。年代決定資料を欠き、時期は明確でない。この2例と他の遺構との関係は今のところ不明である。

## 7 遺構

### (1) 概要

平泉遺跡群の発掘調査で検出される遺構は礎石建物・掘立柱建物・柱穴・溝・塀・道路遺構・井戸や井戸状遺構・土坑・汚物廃棄坑（トイレ状遺構・便所遺構ほか）・池・生産遺構・竪穴建物・祭祀遺構・その他である。

### (2) 掘立柱建物・竪穴建物

礎石建物は西光寺跡を除いた寺院にあるほかは、花立Ⅱ4次検出で花立廃寺と関連するとされる1棟が見ついているだけである。掘立柱建物は多数が図上復元され報告されているものの、調査区の制約を受け形態や規模の全容が明らかな例は柳之御所堀内部を除いては限られている。

中尊寺40次は12世紀第1四半期のかわらけが出土した整地下層黒色土の下から3棟の掘立柱建物が検出された（報4）。倉町4次1号建物は法勝寺系の瓦が柱穴の礎板に使われ、12世紀第2四半期の建物と推測された（報182）。

柳之御所報告書は、12世紀の掘立柱建物と判断された56次までの堀内部の46棟を再検討し、変更を加えたものや新たに想定された22棟を図示している（報102）。57次以降は72次で最北端に検出された1棟（報114）が加わる。堀内部の特徴的な建物を2例あげる。最大規模の建物55SB6は6×6間の総柱である（報100）。第1四半期、初代清衡期の建物と想定された。31SB5は桁行5間、梁行2間の総柱建物で（報89・107）、12世紀第3四半期後半～第4四半期前半頃と想定された。この建物は、倉町4次1号建物・同8次1号掘立柱建物（報184）とほぼ同形・同規模である。『吾妻鏡』文治5年8月21日条は平泉館内の「高屋宝蔵等」の存在を伝えるが、それとの関連が目される。

柳之御所堀外部最大の建物は30SB1である。30次で検出、6次及び40次で確認された柱穴を加えると、四面庇建物で、孫庇を西側に伴うと推測された（報83・86）。

柳之御所以外でも四面庇建物は多い。志羅山の最大規模の建物は47次13区1号掘立柱建物で、総柱の身舎に四面庇が付き、全長は14.6×8.45m（報208）。泉屋の最大規模の建物は16SB6で、四面庇はさらに東西両面に孫庇を伴うと推測された。全長は19.99×11.52m（報233）。国衡館は2次の四面庇建物があるほか（報239）、7次で大型掘立柱建物、9次で大規模掘立柱建物と推測されるものの一部が見ついている（共に報242）。中心地区以外では、衣川北部地区細田1次（報312）と中尊寺地区坂下10次（報65）、太田川南部地区では祇園Ⅱ7次（報263）・祇園Ⅰ1次（報268）・宿4次（報294）で各1棟が報告されている。祇園Ⅰ1次1号建物は3間×4間が検出されたが、四方が調査区外であるため形式や規模は不明。柱穴掘方径が1.1～1.3mと大きく、柱間寸法が規則的で大型の建物が予想されるうえ、少量ながら瓦が出土するなど、単なる住宅建築とは性格が異なるのかも知れない。

無量光院と倉町の周溝を伴う竪穴建物については前述した。柳之御所堀内部の大型の竪穴建物55SX2は32個の柱穴が総柱状に配置され、約547kgの大量のかわらけと共に一気に埋め戻されて

いる（報100・107）。平泉遺跡群には例のない形態の建物で、「倉」の機能を持つと推測される。12世紀第2～第3四半期に属する。

### （3）井戸・井戸状遺構

井戸側を残す井戸以外に、形態や規模・埋土・出土遺物等がそれに類似するものの、井戸側が残っていない、あるいは当初から伴わない素掘りの大型土坑を井戸または井戸状遺構としている。井戸側が残っていたのは柳之御所堀内部4基・同堀外部3基・志羅山3基・花立Ⅱ1基と少ない。

井戸・井戸状遺構は9遺跡145基が確認でき、遺跡の分布は、中心地区6遺跡・柳之御所地区・西部丘陵地区・北上川東部地区が各1遺跡となる。一部について数と全調査面積に対する1基当たりの検出面積を括弧に示すと、柳之御所堀内部61基（1,097㎡）・同堀外部26基（370㎡）・志羅山34基（829㎡）・泉屋18基（1,092㎡）である。他には、花立Ⅱと里が各2基、無量光院・伽羅之御所・国衡館・毛越Ⅰが各1基の検出である。柳之御所堀内部は重複調査や堀を含めた数値で、園池周辺の28・31次に限れば29基（276㎡）と密度が高い。

井戸・井戸状遺構が埋没する過程で人為が働く例が多数に見られる。特に柳之御所堀内部は大量の遺物、なかでもかわらけや木製品が一括投棄されることが多く、かわらけに限っても21SE3が434.7kg、28SE15が232.5kg（共に報89）など100kgを超えるものが5例ある。それに対し、堀外部の遺物の投棄量は少なく、かわらけ100kgや土壁・少数の木製品が出土した30SE6（報83・86）は例外である。柳之御所以外である程度の量のかかわらけと木製品が出土したのは志羅山69次（報205）、木製品のそれは花立Ⅱ3次（報144）など数例にすぎない。井戸・井戸状遺構は遺跡の性格、場の使われ方をよく反映する遺構である。

井戸・井戸状遺構の底面近くから出土する遺物から、井戸鎮めなど井戸祭祀を想定できる例がある。中国産白磁水注の完形品と木製の杓が出土した志羅山21次1号井戸（報193）、中国産青白磁輪花碗とかかわらけ出土した柳之御所堀外部53次井戸（報99）、完形の和鏡が出土した同堀内部31SE2（報89）、和鏡の完形品が蒔絵鏡箱に入っていた伽羅之御所5次井戸（報164）、節を抜いた竹が入れられていた柳之御所堀内部41SE1（報89）などが該当する。同様の状態で完形の円形曲物が出土した柳之御所堀内部21SE1・21SK21（報89）、同外部地区24SE2・25SE1（報80・86）、泉屋13次13SE2（報231）の例、あるいは刀子が出土した堀外部の例などもあるが、井戸祭祀なのか偶発なのか判断が難しい。

### （4）汚物廃棄坑（トイレ状遺構・便所遺構ほか）

数多い土坑のなかに、埋土やその中に包含されるウリ科を主とする種子あるいは篝火（チュウ木）を特徴とするものがあり、汚物廃棄坑・トイレ状遺構（土坑）・便所遺構ほかの名称が使われている。

篝火は1986年の柳之御所堀外部18次の土坑2基からそれぞれ約200本が出土した例が初見である（報77）。その後、汚物廃棄坑は同堀内部を中心に検出が相次いだ。同外部地区は18次以外にはチュウ木600点が出土した29SK2など3基（報82・86）、柳之御所以外では志羅山18基（47次・報208ほか）、泉屋15基（16次・報233ほか）、伽羅之御所7基（5・20次。報164・174）、無量光院2基（4・20次。報41・53）、花立Ⅰ9次1基（報132）と中心地区の遺跡から報告されている。井戸・井戸状遺構の転用例が無量光院4次、柳之御所堀内部56・70次にある（報101・112）。

柳之御所堀内部で69次までに検出された51基を分析・考察した報告があり（佐藤ほか2009）、土坑の性格について、便所そのものであるよりも糞尿処理を目的とした性格をもつと考えられた。

土坑の埋土を分析し、寄生虫卵の検出や花粉分析・種実同定が行われた報告例が多数ある（泉屋28次・報238ほか）。北上川東部地区里の土坑2基（報313）や志羅山47次土坑1基（報208）の



ように、土壌分析の結果、トイレ状遺構の蓋然性は低いと判断された例があるように、考古学的知見だけでは判定が難しい遺構であり、土壌分析はその判定に有効である。

### (5) 池

寺院・柳之御所堀内部以外にも池が検出されている。白山社3次は現白山社境内前面を調査、石積護岸と池底、東西2列約2.4m間隔の橋脚の柱根が検出された(報157)。池は12世紀中葉の造成と考えられる。志羅山66次1号池(報204)は南北道路ⅡAの西に隣接し、排水溝を伴う東側の一部を調査、その後同82・92(報209・213)・96・97次(共に報215)で周辺が調査され、おおよその規模が推定できた。本池は一括の笹塔婆や鴛鴦文銅象嵌鏡轡ほか様々な遺物が廃棄されている。同73・77次は導水溝と池が検出され(報209・208)、花立Ⅱ6次(本澤2001)と同13次(平泉町教育委員会2000)の池は掘立柱建物を伴う。3例はいずれも中島をもつ。志羅山16次(報192)の池は13世紀以降と推測される。

### (6) 生産に係る遺構・遺物

#### a 瓦窯

花立Ⅱに含まれる瓦窯2基は鈴沢地区の区画整理に伴い1975年に行政発掘が行われた(報141)。低地である鈴沢の池の南傾斜面に並んでいたが、保存が決まったことから精査されていない。瓦は剣巴文軒丸瓦の写真1点が掲載されているだけで、詳細は不明であるが、本遺構が供給源となる瓦が志羅山35・52次の低地調査で多数出土した(報199・203)。

#### b 陶器窯

ごく一部が残った3基の窯が花立Ⅰ28・29次で調査された(報139・140)。1号窯は大碗や碗・壺・甕類が出土、成形や調整技法から12世紀前半のものと判断された。残り2基は遺物が出土せず、性格は確定していない。日本中世窯業史のうえでも重要な遺構・遺物である。

#### c 梵鐘製造遺構

白山社の北東、無量光院の南東部にあたる白山社4次で調査された(平泉町文化財センター編2000)。12世紀第3四半期後半から第4四半期初頭の遺構で、製品は無量光院への奉納と推測された(八重樫1998)。

#### d 鍛冶関連遺構

倉町1次遺構1は部分調査され(報180)、残りを調査した志羅山47次でフィゴ羽口・椀型滓・粒状滓・鍛造剥片が出土し、12世紀もしくはそれ以降の鍛冶関連遺構とされた(報208)。精錬鉄滓と鍛造剥片は共に砂鉄を鉄源とするという科学分析結果が出ている。国衡館14次の12世紀の可能性があるとされた鍛冶遺構からは鉄滓・鍛造剥片・金床石・フィゴ羽口が出土した(報245)。鉄滓やフィゴ羽口の出土は中心地区、特に志羅山に多く、周辺地区からの出土はごく少数にすぎない。

#### e 銅の鑄造と銅細工

鑄造遺構ではないが、志羅山80次では埴塙を埋納した小土坑2基が見つかり、遺物包含層を中心に廃棄された埴塙片多数やフィゴ羽口・金付着銅板屑など(報208)、近隣の75・77・78次(共に報207)・76次(報206)ほかの調査区からは埴塙や銅製品・鑄型が出土。その一帯から110mほどの西～南西を中心とした一定範囲の志羅山37次は和鏡(報201)、同29次(報198)、同40・60次(共に平泉町文化財センター編2000)は六器・花瓶などの鑄型が出土、銅の鑄造に係る遺構が周辺に埋蔵されている可能性が高い。鑄型は同39・52次でも出土している(報202・203)。志羅山以外には花立Ⅱ1次で埴塙が出ている(報142)。

### (7) 祭祀遺構

#### a 地鎮具埋納土坑

地鎮を目的としたと考えられる土坑がある。柳之御所堀内部中心域の28SX 1は輪宝と榧・小型手づくねかわらけ、28SK14は金槌と鑿が埋納されていた（報89）。同堀外部27SK13は合わせ口の大型ロクロかわらけに有孔鉛ガラス玉14点が入れられ、手づくね大型かわらけが正位で置かれた27SK24も同様の遺構と考えられた（報82・86）。太田川南部地区宿1次では、かわらけを1個、あるいは合わせ口の状態で埋納した小土坑10基が見つかり、かわらけ内に石英2個、土坑内に親指の爪大の円礫186個が入れられていたものもある。2群に分かれるとみられる（報292）。

#### b その他

毛越寺円隆寺前面の幢遺構に類似した遺構が柳之御所堀内部21・31次で検出され、「特殊柱列」と報告された（報89）。大型柱穴3個が東西に並ぶ31SX 1・31SX 2は同じ形態で、一部が重複する。園池23SG 1の西、無量光院からの張り出し部に面する位置にあり、両者に係る儀式が執り行われたのであろう。柱穴を直線的に並べた21SX36と21SX37の2基は南端に検出、21SX36は橋21SX35の北側に検出されたが、「加羅御所」擬定地の伽羅之御所からの張り出し部に面する位置でもある。

## 8 遺物

### （1）概要

柳之御所堀内部の平泉バイパス等関連の6次の調査はかわらけ約10.5トンが出土した（報89）。かわらけ、そして堀内部の性格を非常によく反映している。かわらけをはじめ、国産陶器・中国産陶磁器・木製品・漆器・漆製品・石製品・金属製品、動・植物遺存体ほか、多種多様な遺物には個別の遺跡、また地区別の違いが明確に表れている。

### （2）かわらけ

数量に違いがあるにしろ、かわらけの出土は8地区すべてに及ぶ。53遺跡中、かわらけが出土していないのは、中心地区高衡館、太田川南部地区片岡Ⅰ、一部不明な点があるが北上川東部地区の佐藤屋敷の3遺跡である。編年の指標になるかわらけ群のいくつかを簡単に紹介する。

1991・92年調査の中尊寺40次でロクロ成形の壙と小皿・柱状高台の一群が整地下層黒色土中から出土（報4）、一般に「金剛院下層」と呼ばれる。1999年、柳之御所堀内部52SE10から、それまで知られていなかった大型の柱状高台や大型壙等が一括で出土（報96）、2例は第1四半期の指標となる。1991年の伽羅之御所5次井戸出土の壙・小皿のロクロかわらけは和鏡を伴う（報164）。中葉、第2四半期の資料である。1994年調査の志羅山35次の5層最下位の手づくねかわらけは、出土層位及び京都編年との比較から平泉の手づくねかわらけでは最も古く、1150年頃のものとした（報199）。手づくねかわらけの導入年代は現在も定まっていない。柳之御所堀内部には年輪年代測定が行われた折敷を伴うかわらけが井戸状遺構から出土している。31SE 2は全てロクロかわらけで、測定値1136年の折敷を伴い第2四半期、28SE16はロクロかわらけと手づくねかわらけが混在し、1138・1158年の折敷を伴い第3四半期とすることができる（共に報88）。2000年調査の52SE 8からは手づくねかわらけが多量に出土、形態や成形技法から平泉最終期の一群と捉えられた。共伴する折敷は1186年である（報98）。

### （3）国産陶器

渥美・常滑・須恵器系、一部ではそれに在地系の水沼や窯不明製品が混じる国産陶器は広範囲に分

布し、53遺跡中、出土していないのは中心地区高衡館、太田川南部地区片岡Ⅱ、西部丘陵地区毛越Ⅵ、北上川東部地区月館Ⅰ・新山権現社・小島館の6遺跡である。分布の中心が柳之御所と中心地区にあることはかわらけや中国産陶磁器と同様である。

完形品や接合復元された個体は全般に少ない。柳之御所堀外部24・27次調査は常滑三筋文壺・渥美袈裟文壺・渥美大甕・須恵器系甕が接合復元され、27次は破片から個体数を想定するなど、詳細を報告している（報80・82・86）。堀内部は破片が数多く出土するものの、器形をうかがわせる資料は常滑壺と渥美壺にわずかにあるにすぎない。志羅山52次3号溝からは完形の常滑三筋文壺と接合復元可能な常滑大甕が出土（報203）。破片が土坑へ一括廃棄された志羅山17次10号土坑は渥美・常滑・須恵器系・東山系があり、器種は大甕・壺・波状文四耳壺・三筋文壺である（報192）。同28次2号土坑からも一括廃棄の破片が出土、常滑大甕・渥美大甕・須恵器系甕・波状文四耳壺・在地系甕がある（報197）。同21次は在地系の水沼壺が接合復元されているほか、常滑は大甕・壺・三筋文壺、渥美は片口鉢・山茶碗・大甕・刻画文壺、猿投・東山系は壺・提子、須恵器系は片口鉢・波状文四耳壺・甕と産地及び器種が豊富である（報193）。接合復元された中には泉屋10次の常滑凸帯付四耳壺のように類例の少ない製品もある（報231）。なお、渥美刻画文や常滑三筋文壺が多数出土している点を平泉の特徴の一つにあげることができる。

#### （4）中国産陶磁器

平泉遺跡群53遺跡のうち、発掘調査件数や面積・出土地点・数量を問わなければ39遺跡から中国産陶磁器が出土している。

完形品等・接合復元品・破片を区別せずに1点と数えた場合、白磁と青磁・青白磁の磁器が3,786点、陶器が459点である。磁器の出土数が多いのは柳之御所2,304点、志羅山540点、泉屋368点、倉町111点、中尊寺79点の順で、5遺跡が全体の90%を占める。残り34遺跡のうち、10点以下の出土は22遺跡であり、1点しか出土していない遺跡も多い。周辺地区からの出土は25遺跡165点と少なく、その内の61点は中尊寺地区坂下・衣関の出土であるから、残りの遺跡からの出土が僅少であることが分かる。

平泉遺跡群全体でみた磁器の種類別数は、白磁2,768点、青白磁511点・青磁376点、不明・その他104点である。白磁の器種別では壺・水注類1,743点、碗・皿類925点、不明・その他100点になる。倉町4次は白磁2点に対し、青白磁が99点と特異な比率を示すが、1号建物の柱穴や周辺からの出土である（報182）。

完形品や略完形品・接合復元品は僅少である。井戸祭祀に使われたと推測される志羅山21次・柳之御所堀外部53次の2例のほか、柳之御所堀内部50SE 3出土の漆布着せされた白磁四耳壺（報96）、泉屋21次の白磁四耳壺（報233）などがあるに過ぎない。

陶器の数量は多くはない。褐釉陶器や緑釉陶器などがあり、接合復元できたものに柳之御所堀内部21SD 1出土の黄釉褐彩四耳壺がある（報89）。

#### （5）木製品

木製品はかわらけや陶磁器等と違い、遺物が残り出土する条件の中に自然条件も加わるが、柳之御所をはじめ、猫間ヶ淵・中尊寺・志羅山・花立Ⅰ・花立Ⅱ・白山社・無量光院・伽羅之御所・泉屋の各遺跡から出土する。周辺地区からの報告はない。同じ柳之御所でも堀内部が堀や井戸状遺構・土坑・園池などから多種多様な木製品が数多く出土するのに対し、堀外部では遺構・遺物とも限られ、様相が大きく異なる。柳之御所以外では志羅山に多く、他は一部を除いて種類・数とも限られる。以下、主に柳之御所堀内部の遺物に代表させて述べる。

#### a 折敷

柳之御所59次までの資料を集計し、形態分類や規格ほかについて考察した報告がある（佐藤ほか2009）。178点が集計され、堀内部177点に対し、堀外部1点と際立った違いをみせている。堀内部では堀・井戸状遺構・トイレ状遺構含む土坑から出土し、井戸状遺構が70%を占める。特に多いのは52SE 8の40点、次いで28SE 2の20点、50SE 3の13点である。堀内部ではI期～V期の遺構変遷が想定され（佐藤ほか2008）、Ⅲ期12世紀第3四半期前半以降、井戸状遺構への廃棄はそれぞれの時期の中心建物群が供給源となっていることが知られる。そこでは折敷を用いた饗宴がたびたび繰り返されていたことであろう。柳之御所以外には志羅山や伽羅之御所・花立Iで出土しているが、破片のうえ僅少である。

#### b その他

多数が出土する折敷や箸などがある一方、1点ないしはごく少数があるにすぎない器種がある。円形曲物は多いが、長さ47.8cmと大きな長方形曲物の完形品がある。杓子（杓子形木製品）も多数出土するが、全長70.6cmと大きな1点がある。物差は完形2点・破片1点が出土し、1点は1寸の長さが鯨尺目盛相当の裁衣尺になる。遊戯具や宝塔・形代・呪符などの信仰・呪術遺物は1点～数点の出土であるが、笹塔婆は15点と多い。雑具である御簾錘3点、漁猟具の網針は1点、火鑽板や火鑽杵は4点がある。建築部材等では屋根板と思われる板材と共に破風板1点が31SE 2、猿頬面になる格子が31SE 7から出土した。なお、希少例ではないが、糸巻の梓木と横木が中心域近くの28SE16から21点、同31SE 8から19点が出土したことは注目できる。

#### （6）漆器・漆製品・関連遺物

漆器は椀と皿が柳之御所・中尊寺・坂下・志羅山・花立IIで確認できる程度で、数も少ない。漆塗りの下駄が柳之御所堀内部41次（報89）と志羅山35次（報199）、扇骨が志羅山77次（報207）にある。他には蒔絵鏡箱・弭・鳴簫・烏帽子・鉄製札に漆が使われている。柳之御所堀内部からは蓋や箱・部材・小型円板・朱漆が塗られた蜜柑玉状木製品などが出土している。

漆塗りに係る道具は柳之御所堀内部で濾し布や刷毛・篋・容器に用いられたかわらけ・パレットのような使用が考えられる国産陶器片（報89）、志羅山30次5号土坑からは濾し布と刷毛・漆紙（報198）、花立I 8次は刷毛（報131）が出土。柳之御所堀内部41次の漆紙は後に文字様の痕跡が赤外線カメラで確認された（報110）。漆紙は、志羅山33次（報200）、白山社6次（報202による）にもある。

#### （7）瓦

瓦は数を問わなければ、中尊寺、柳之御所地区の柳之御所と猫間ヶ淵・高館、中心地区の毛越寺・白山社・伽羅之御所・鈴沢の池・志羅山・泉屋・花立I・花立II・倉町・国衡館と多くの遺跡で出土し、西部丘陵地区毛越I、太田川南部祇園II・祇園I・高玉・高田からも僅少が報告されている。

平泉遺跡群の瓦は、12世紀前半代の蓮華文・唐草文系と後半代の巴文・剣頭文系の大別2群が存在する。倉町4次は法勝寺系の瓦が1号建物の柱穴の礎板に使われていた（報182）。蓮華文・唐草文系は花立II 13次で2,000点超が出土しているが、詳細は不明である（平泉町教育委員会2000）。その他には柳之御所堀内部や猫間ヶ淵・志羅山・泉屋から僅少が出土している。巴文・剣頭文系は前述のように鈴沢瓦窯2基があり、そこを供給源とする瓦が志羅山35次391点・52次408点が出土（報199・203）。柳之御所の出土はほとんどが堀内部からで、堀外部からの出土は僅少である。堀内部13次の井戸1基から700点超とまとまった量が出土（報75）、同地点は後の31次調査区に含まれるが、同区の出土量も多く、近接した猫間ヶ淵3次は溝から100点弱が出土した（報123）。52次は井

戸状遺構 2 基を中心に、また56次は猫間ヶ淵にある堀検出時に、それぞれ130点超が出土（報98・101）。

#### （8）土壁

建物の構造を知るうえで重要な遺物である。柳之御所と志羅山・無量光院で報告され、他に中心地区の遺跡に疑問符つきで報告された例がある。柳之御所堀内部の土壁について、64次報告書はそれまでの資料についての考察と「土壁白色層は白土」とする成分分析結果（報106）、69次報告書は遺構ごとの重量一覧（報110）を掲載した。それによると、出土総量は約444kgで、近接している31SE 7と31SE 6の2基が50%を占めることが分かる。同堀外部は30SE 6から46kg（報83・86）、志羅山17次10号土坑は一括投棄の90kg（報194）が出土。同13次や18次ほかにも出土報告があるが僅少である。無量光院23次はやや多い数の細片が出土、白壁も認められた（報56）。

#### （9）その他の遺物

##### a 信仰・呪術遺物

信仰や呪術に係る遺物が主に木製品に残されているが、分布は柳之御所・中尊寺のほか、毛越寺・志羅山・白山社・伽羅之御所・花立Ⅰ・花立Ⅱと中心地区の遺跡に限られている。

笹塔婆は志羅山66次1号池から計50点（82次でも出土。報204・209）がまとまって出土、中尊寺40次の6点は12世紀第1四半期（報4）、伽羅之御所5次の1点は現存長24cmの板塔婆で、12世紀中葉に属する（報164）。そのほか、柳之御所堀内部23次ほか（報89ほか）、同堀外部53次（報99）、志羅山77・88次（報207・211）、白山社3次（報157）などから出土。小型木製宝塔は、毛越寺が大池ほかから30点（報31・33・34・36）、柳之御所堀内部が5点（報88・89・95・96）と出土に限られる。烏帽子を被った人物の顔が描かれた完形の人面墨書土器は柳之御所堀内部の28SE 4（報89）、呪符は柳之御所堀内部（報89）と志羅山28次（報197）から出土。形代は柳之御所堀内部に集中し、他からの出土は僅少である。堀内部からは人形・立体人形・刀形・刀子形・鎌形・剣形・筭形・陽物形・鳥形・砧形・杵形・五輪塔形・陸に墨痕が付いた木製硯が出土（報88・89・95・96）。立体人形は中尊寺40次（報4）・志羅山80次（報208）、陽物形は柳之御所堀外部53次（報99）・志羅山66・77次（報204・207）にあり、柳之御所堀外部35次では土製陽物が出土した（報85・86）。特異なものとして、最大径32.2cmの花瓶と外径40cmの火舎がある。鉄製鋳物で柳之御所堀内部21SK108から重なって出土した（報89）。

##### b 武器・武具・馬具

中尊寺や柳之御所のほか、中心地区の志羅山・伽羅之御所・白山社・花立Ⅰ・花立Ⅱ・泉屋にある。鉄鏃は、柳之御所堀外部24次（報80・86）・中尊寺40次（報4）、志羅山29・52・66次（報198・203・204）、伽羅之御所12次（報168）・花立Ⅱ12次（報147）・白山社3次（報157）にあるが、1ないし2点である。武器類は、漆塗りの弓が柳之御所堀内部21SE 1（報89）、漆塗り鳴鏑が志羅山66次1号池（報204）、銀製太刀の柄部分のものとみられる四花銀製座金具が同91次（報213）、時期については触れていないが、土中に突き刺さった状態で出土した茎を欠いた残存長69.4cmの刀が同29次（報198）にある。武具は、漆塗り鉄製札3点が柳之御所堀内部52SK24にある（報98）。馬具は、杏葉轡が柳之御所堀内部28SE11（報89）、鴛鴦文銅象嵌鏡轡の略完形品が志羅山66次1号池から出土、後者について、久保智康氏は法住寺殿跡出土の鶴文銅象嵌鏡轡との比較から平泉で製作された可能性を指摘している（久保2000）。柳之御所堀外部35次では鞍と推測された金銅製品1点が出土している（報85・86）。

なお、ウマの骨や歯は志羅山66次や伽羅之御所5次（報164）ほかで少数が見つまっている。

### c 和鏡

中尊寺と柳之御所、中心地区の白山社・泉屋・伽羅之御所・北上川東部地区里の計6遺跡から10点が出土している。

完形品は白山社3次の花枝草雀鏡(報157)、伽羅之御所5次の山水飛雁鏡(報164)、柳之御所堀内部の松鶴双鏡(報89)、同堀外部の秋草双鳥鏡(報80・86)、里の草花双鳥鏡(報314)である。伽羅之御所と柳之御所の鏡は井戸祭祀に係るもの、白山社のそれは池への奉納と推測される。破片は、中尊寺40次の唐草双鳥五花鏡(報4)、柳之御所堀内部28次の八稜鏡(報89)、泉屋13次の瑞花双鳥鏡(報232)、里の松鶴鏡、柳之御所堀外部20次の鏡式不明(報79)がある。杉山 洋氏は京都産との比較、また志羅山37次で和鏡の鑄型が出土していることなどを踏まえ、10点の中に平泉産が含まれている可能性を指摘している(杉山2002)。

### d 木簡・文字資料・絵画資料

種類を問わず、なんらかの文字が認められる資料は柳之御所と中尊寺・毛越寺・志羅山・花立Ⅱ・泉屋にあるが、解説でき、内容が把握できるものはわずかである。柳之御所73次報告書は文字資料出土遺構の概要を述べ、堀内部の70次調査までの資料を89点とする(報115)。広く知られている資料に柳之御所堀内部から出土し、「人々給絹日記」の表題をもつ完形の墨書折敷がある(報89)。奥州藤原氏や堀内部の性格に係る第一級の資料である。同堀内部69SX 3は「タラウタユニ丈」(「太郎太夫二丈」)の木簡(報110)、同堀外部53次井戸は桶や鉢・杓など容器・道具類の名と数が記された木簡(報99)志羅山80次は結縁に係る内容を持つ片仮名木簡(報209)、同88次は仏教関連習書木簡(報212)、が出土。また、中尊寺73次大池出土の手づくねかわらけ底部片は「泉」の墨書が確認できる(報19)。

墨画と刻画が柳之御所・中尊寺・花立Ⅱにある。寝殿造風の絵を描いた折敷が柳之御所堀内部中心域の28SE 2(報89)、カエルを描いた折敷が同74次内堀72SD 1(報116)から出土、後者は、画は稚拙であるが、『鳥獣人物戯画』甲巻にモチーフ・デザインが通ずるものがあり、後白河院政期の京都との関係を推測させる。中尊寺40次では箱の側板に女性の全身を描いた画が出土、12世紀第1四半期の遺物である(報4)。柳之御所堀外部18次の墨画折敷を割って転用した多数のチュウ木の中に接合した2点があり、1点はそれぞれ片面に山と草花、他の1点は鹿が描かれたと推測された(報77)。同30次井戸30SE 6の曲物底板片は線刻されたザクロ(報83・86)、花立Ⅱ3次の小薄板片は笹の葉状の墨画と漢字数文字(報144)が認められる。数多い渥美刻画文陶器のなかに紅葉文が見られるが、柳之御所堀外部27SD10出土の全長6.1cmの刻画文青銅製品は渥美大アラコ窯の紅葉文に酷似する(報82)。

### e 遊戯具

双六の駒や碁石・将棋の駒少数が出土するが、中尊寺・柳之御所、そして中心地区の数遺跡に限られている。柳之御所堀内部11次は双六の駒1点と、柱穴から一括で出土し碁石と判断された白黒16個の自然石がある(報74)。碁石は泉屋ほかにも少数がある。サイコロは泉屋5次で土製(報227)、志羅山5次で木製が出土。将棋の駒は3遺跡で見つまっている。中尊寺40次の14点(報4)は12世紀第1四半期に属する。柳之御所堀内部園池23SG 1からは2点が出土(報89)。志羅山88次の両面に「飛龍」とある1点(報211)は大将棋に使われたと推測される。そのほか、柳之御所堀内部出土の毬打の毬や独楽・木トンボなども遊戯具に含めることができる。

### f その他

「磐前村印」(訓み「いわさきむらのいん」)の印面を持つ銅印が柳之御所堀内部50SE 3から出土

(報96)、遺跡の性格に係る遺物の一つである。堀内部からは、溶解した金が付着した小礫・魚々地の金銅製隅金具・内耳鉄鍋略完形品・木箱入りの状態の温石なども出土(報89)。烏帽子が柳之御所堀外部30次井戸30SE 2から出土、漆塗りの絹製品で立烏帽子の可能性が高い(報83・86)。烏帽子と推定される布製品は志羅山21次(報193)、漆塗りの絹製品片は同52次(報203)にある。埴子金具が柳之御所堀内部50次(報96)・志羅山21・66次(報193・204)にある。文房具は、筆先が柳之御所堀外部53次井戸から出土(報99)、硯は柳之御所にほぼ限られ、堀内部からは猿面硯・石硯・陶硯が出ている(報89)。

## 9 まとめ

柳之御所堀内部を中心にして、取り上げた平泉遺跡群の範囲を測ると、南西約6kmと離れている西光寺を除いては半径約3.4km内、その中央部の中尊寺地区・柳之御所地区・中心地区は半径約1.9km内に収まる。このように決して広くはない地域であるが、長期にわたって発掘調査が継続され、12世紀に係る53遺跡については577次・約33万㎡を調査し、膨大な考古学データが蓄積されてきた。

本稿ではできる限り多くの考古学データの提示を意図したが、割愛した遺跡・遺構・遺物は多く、特に柳之御所や志羅山・泉屋ほか主要な遺跡についてはその一端を示すにとどまった。発掘調査報告書を1次情報として活かし、より高次の情報へと引き上げて様々な角度から「都市平泉」を描き出すことが、いま考古学に求められているであろう。

### 引用・参考文献

- 井上雅孝2009 『奥州平泉から出土する土器の編年的研究—12世紀代における中世土器様式の成立と展開—』、井上雅孝。
- 及川 司2012 「中尊寺境内の発掘調査」『世界遺産・中尊寺 遺跡発掘の軌跡 1953~2011』、中尊寺仏教文化研究所論集第3号、中尊寺。
- 久保智康2000 「6 鴛鴦文銅象嵌鏡について—法住寺殿跡出土土器との比較を中心に—」。表2報告書番号204所収。
- 佐藤嘉広・西澤正晴・吉田 充・岩淵 計2008 「柳之御所遺跡堀内部地区の建物復元(中間発掘調査報告書 その4) —史跡整備計画との関わりを中心に—」『平泉文化研究年報』、第8号、岩手県教育委員会。
- 佐藤嘉広・岩淵 計・西澤正晴・千葉雅彦2009 「柳之御所遺跡堀内部地区の建物復元(中間発掘調査報告書 その5) —史跡整備計画との関わりを中心に—」『平泉文化研究年報』、第9号、岩手県教育委員会。
- 杉山 洋2002 「1 平泉周辺の和鏡について」。表2報告書番号313所収。
- 羽柴直人2002 「平泉の道路と都市構造の変遷」入間田宣夫・本澤慎輔編『平泉の世界』、高志書院。
- 平泉町文化財センター編2000 『柳之御所資料館常設展示図録』。柳之御所資料館。
- 平泉町教育委員会2000 『遺跡が語る平泉文化』柳之御所資料館第1回特別展図録、平泉町・平泉観光推進実行委員会。
- 本澤慎輔1993 「12世紀平泉の都市景観の復元」『古代文化』、45-9、古代学協会。
- 本澤慎輔2001 「平泉の庭園遺構」。『都市・平泉—成立とその構成—』日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集、日本考古学協会2001年盛岡大会実行委員会。
- 八重樫忠郎1998 「平泉・白山社遺跡の梵鐘鑄造遺構」『季刊考古学』、No.62、雄山閣。

表2 平泉遺跡群発掘調査報告書一覧

報告書番号	調査年	調査回数	報告書名	シリーズ名	発行年
<b>1 中尊寺跡</b>					
1	1959~68	3~16次	『中尊寺一発掘調査の記録一』	—	1983
2	1976	17次	『中尊寺境内閣加堂跡地区の発掘調査』(『世界遺産・中尊寺 遺跡発掘の軌跡 1953~2011』所収)	中尊寺仏教文化研究所 論集 第3号	2012
3	1979	25次	『中尊寺境内法泉院地区の発掘調査』(『世界遺産・中尊寺 遺跡発掘の軌跡 1953~2011』所収)	中尊寺仏教文化研究所 論集 第3号	2012
4	1991~92	40次	『特別史跡中尊寺境内 金剛院発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第53集	1994
5	1994	43~44次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第43集	1994
6	1995~96	51次・50次I期	『特別史跡中尊寺境内 内容確認調査報告書(I)』	岩手県平泉町文化財調査報告書第66集	1997
7	1997~98	54次	『特別史跡中尊寺境内 内容確認調査報告書(II) 遺構編』	岩手県平泉町文化財調査報告書第69集	1998
8	1998	55次	『特別史跡中尊寺境内 内容確認調査報告書(III)』	岩手県平泉町文化財調査報告書第74集	1999
9	1999~2000	57~59次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第75集	2000
10	2000	61~62次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第77集	2001
11	2001~02	61次II期・63~64次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第78集	2002
12	2002	65次	『中尊寺跡第65次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第84集	2004
13	2002~03	61次III期・65次I期・66~67次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第81集	2003
14	2003~04	68~69次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第85集	2004
15	2004	70次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第92集	2005
16	1996~2003	51・54・55・59・62・64・67・69次	『特別史跡中尊寺境内内容確認調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第98集	2006
17	2005	71次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第97集	2006
18	2006	72次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第108集	2008
19	2007	73次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第110集	2009
20	2008	74~76次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第114集	2010
21	2009	77次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第116集	2011
22	2010	78~80次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第118集	2012
23	2011	81~82次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第120集	2013
<b>2 毛越寺跡</b>					
24	1955~58	—	『平泉 毛越寺と観自在王院の研究』	—	1961
25	1980~81	1・2次	『昭和55年度 特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書(第1次調査・第2次調査)』	—	1981
26	1981~82	3次	『昭和56年度 特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書』	—	1982
27	1982~83	4次	『昭和57年度 特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書(第4次調査)』	—	1983
28	1983~84	5次	『特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発掘調査報告書—第5次調査—』	—	1984
29	1984	6次	『特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発掘調査報告書—第6次調査—』	—	1985
30	1985~86	7次	『特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発掘調査報告書—第7次調査—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第7集	1986
31	1986~87	9次	『特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発掘調査報告書—第9次調査—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第10集	1987
32	1986~87	8~10次	『毛越寺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第127集	1988
33	1987	11次	『特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発掘調査報告書—第11次調査—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第12集	1988
34	1988	12次	『特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発掘調査報告書—第12次調査—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第14集	1989
35	1990~91	13次	『特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発掘調査報告書—第13次調査—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第26集	1991
36	1980~91	1~13次総括	『特別史跡毛越寺境内・特別名勝毛越寺庭園整備報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第106集	2007
<b>3 観自在王院跡</b>					
37	1954~56	—	『平泉 毛越寺と観自在王院の研究』	—	1961
38	1972・73・75~77	(1~5次)	『観自在王院跡発掘調査報告書』	—	1979
<b>4 無量光院跡</b>					
39	1952	1次	『無量光院跡』	埋蔵文化財発掘調査報告 第三	1954
40	1992	3次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第34集	1993
41	1994	4次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第47集	1995
42	1998	5~7次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第73集	1999
43	1999	8~10次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第75集	2000
44	2000	11次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第77集	2001
45	2002~03	12次	『特別史跡無量光院跡内容確認調査報告書—第12次調査—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第83集	2003
46	2003	13次	『特別史跡無量光院跡発掘調査報告書 I—第13次調査—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第87集	2004
47	2003	14次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第85集	2004
48	2004	15次	『特別史跡無量光院跡発掘調査報告書 II—第15次調査—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第91集	2005
49	2004	16次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第92集	2005
50	2005	17次	『特別史跡無量光院発掘調査報告書 III—第17次調査—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第99集	2006
51	2006	18次	『特別史跡無量光院発掘調査報告書 IV—第18次調査—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第107集	2008
52	2007	19次	『特別史跡無量光院発掘調査報告書 V—第19次調査—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第109集	2009
53	2008	20次	『特別史跡無量光院発掘調査報告書 VI—第20次調査—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第113集	2010
54	2009	21次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第116集	2011
55	2009	22次	『特別史跡無量光院発掘調査報告書 VII—第22次調査—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第115集	2011
56	2010	23次	『特別史跡無量光院発掘調査報告書 VIII—第23次調査—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第117集	2012
57	2011	24次	『特別史跡無量光院発掘調査報告書 IX—第24次調査—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第120集	2013
58	2012	25次	『特別史跡無量光院発掘調査報告書 X—第25次調査—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第121集	2014
59	2012	26次	『平成25年度発掘調査報告書』 * 26次概報収録	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第620集	2013
<b>5 金鶏山遺跡</b>					
60	1993	1次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第43集	1994
61	—	—	『花立 I 遺跡(第2・3・4次)・白山社遺跡(第3次)・西光寺跡(第2次)発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第89集	2004
62	2007	3~4次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第110集	2009
<b>6 坂下遺跡</b>					
63	2005	5次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第97集	2006
64	2006	9次	『平成18年度発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第505集	2007
65	2006	10次	『坂下遺跡第10次発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第509集	2008
66	2006	11次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第108集	2008
67	2008	13次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第110集	2009
68	2008	14次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第114集	2010
69	2012	15次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第122集	2014
<b>7 衣関遺跡</b>					
70	1991~92	1次	『衣関遺跡第1次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第31集	1993
71	1993	2次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第43集	1994
72	1997	5次	『花立 I 遺跡(第9・12・13次)・衣関遺跡(第5次)発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第285集	1999
73	2005	6次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第97集	2006
<b>8 柳之御所遺跡</b>					
74	1982	11~12次	『柳之御所跡発掘調査報告書—第11・12次発掘調査概報—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第1集	1983
75	1983	13~16次	『柳之御所跡発掘調査報告書—第13・14・15・16次発掘調査概報—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第3集	1984
76	1985	17次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第6集	1985
77	1986	18次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第11集	1987
78	1987	19次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第13集	1988
79	1988	20~22次	『柳之御所跡発掘調査報告書—第20・22次発掘調査—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第15集	1989
80	1989	24・25次	『柳之御所跡発掘調査報告書—第24次・25次調査概報—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第19集	1990
81	1990	26次	『東北電力鉄塔用地(No.49、No.48、No.47)発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第20集	1990
82	1990	27・29次	『柳之御所跡発掘調査報告書—第27・29次調査概報—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第24集	1991
83	1991	30次	『柳之御所跡発掘調査報告書—第30次調査概報—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第28集	1992



84	1991	32~34次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第29集	1992
85	1992	35次	『柳之御所跡発掘調査報告書—第35次調査概報—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第32集	1993
86	1989~92	24・25・27・30・35 次	『柳之御所跡発掘調査報告書—平泉ハイパス・一閑遊水地関連調査遺跡発掘調査—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第38集	1994
87	1992	37次	『平泉遺跡群範囲確認調査—第37次柳之御所発掘調査報告書—』	岩手県文化財調査報告書第94集	1993
88	1992	38~40次	『平泉遺跡群発掘調査報告書—柳之御所跡第38次・39次・40次発掘調査—』	岩手県平泉町文化財調査報告書第33集	1993
89	1988~93	21・23・28・31・ 36・41次	『柳之御所跡—一閑遊水地事業・平泉ハイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査報告書—』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集	1995
90	1993	42次	『平泉遺跡群範囲確認調査報告書—第42次柳之御所発掘調査報告書—』	岩手県文化財調査報告書第96集	1994
91	1993	43次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第40集	1994
92	1993	44次	『平泉遺跡群範囲確認調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第39集	1994
93	1994	45次	『柳之御所跡第45次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第46集	1994
94	1994	46次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第47集	1995
95	1997-98	47~49次	『柳之御所遺跡—第47・48・49次発掘調査概報—』	岩手県文化財調査報告書第104集・平泉遺跡群発掘調査報告書	1999
96	1999	50次	『柳之御所遺跡—第50次発掘調査概報—』	岩手県文化財調査報告書第107集・平泉遺跡群発掘調査報告書	2000
97	1999	51次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第75集	2000
98	2000	52次	『柳之御所遺跡—第52次発掘調査概報—』	岩手県文化財調査報告書第111集・平泉遺跡群発掘調査報告書	2001
99	2000	53・54次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第77集	2001
100	2001	55次	『柳之御所遺跡—第55次発掘調査概報—』	岩手県文化財調査報告書第113集・平泉遺跡群発掘調査報告書	2002
101	2002	56次	『柳之御所遺跡—第56次発掘調査概報—』	岩手県文化財調査報告書第117集・平泉遺跡群発掘調査報告書	2003
102	2003	57次・総括	『柳之御所遺跡』	岩手県文化財調査報告書第118集・平泉遺跡群発掘調査報告書	2004
103	2003	58次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第85集	2004
104	2004	59次	『柳之御所遺跡—第59次発掘調査概報—』	岩手県文化財調査報告書第121集・平泉遺跡群発掘調査報告書	2006
105	2004	60~63次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第92集	2005
106	2005	64次	『柳之御所遺跡—第64次発掘調査概報—』	岩手県文化財調査報告書第123集・平泉遺跡群発掘調査報告書	2007
107	2006	65次	『柳之御所遺跡—第65次発掘調査概報—』	岩手県文化財調査報告書第125集・平泉遺跡群発掘調査報告書	2008
108	2006	66次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第108集	2008
109	2007	68次	『柳之御所遺跡—第68次発掘調査概報—』	岩手県文化財調査報告書第127集・平泉遺跡群発掘調査報告書	2009
110	2008	69次	『柳之御所遺跡—第69次発掘調査概報—』	岩手県文化財調査報告書第130集・平泉遺跡群発掘調査報告書	2010
111	—	—	『柳之御所遺跡—第1期保存整備事業報告書—』	岩手県文化財調査報告書第131集	2010
112	2009	70次	『柳之御所遺跡—第70次発掘調査概報—』	岩手県文化財調査報告書第133集・平泉遺跡群発掘調査報告書	2011
113	2009	71次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第116集	2011
114	2010	72次	『柳之御所遺跡—第72次発掘調査概報—』	岩手県文化財調査報告書第135集・平泉遺跡群発掘調査報告書	2012
115	2011	73次	『柳之御所遺跡—第73次発掘調査概報—』	岩手県文化財調査報告書第137集・平泉遺跡群発掘調査報告書	2013
116	2012	74次	『柳之御所遺跡—第74次発掘調査概報—』	岩手県文化財調査報告書第140集・平泉遺跡群発掘調査報告書	2014
<b>9 高館跡</b>					
117	1964	1次	奥州平泉高館	岩手大学教育学部研究年報 第26巻	1966
118	1993	3次	『平泉遺跡群範囲確認調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第39集	1994
119	2002	5次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第81集	2003
120	2004	6次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第92集	2005
<b>10 猫間ヶ淵跡</b>					
121	1986	1次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第11集	1987
122	1987	2次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第13集	1988
123	1990	3・4次	『東北電力鉄塔用地(No.49、No.48、No.47)発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第20集	1990
124	2003	5次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第81集	2003
125	—	—	『柳之御所遺跡』	岩手県文化財調査報告書第118集	2004
<b>11 花立 I 遺跡</b>					
126	1950	—	平泉花館遺址	文化財調査報告 第1輯	—
127	1984-85	2~4次	『花立 I 遺跡第2・3・4次、白山社遺跡第3次、西光寺跡第2次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第89集	2004
128	1992-93	5次	『花立 I 遺跡第5次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第37集	1993
129	1993	6次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第40集	1994
130	1993-94	7次	『花立 I 遺跡第7次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第42集	1994
131	1994	8次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第47集	1995
132	1994~96	9・12・13次	『花立 I 遺跡(第9・12・13次)・一閑遊跡(第5次)発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第285集	1999
133	1998	15・16次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第73集	1999
134	1999	17・19次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第75集	2000
135	2000	20次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第77集	2001
136	2002	21・22次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第81集	2003
137	2003	23次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第85集	2004
138	2004	24次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第92集	2005
139	2007	27・28次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第110集	2009
140	2008	29次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第114集	2010
<b>12 花立 II 遺跡</b>					
141	1975	—	『鈴沢地区緊急発掘調査(略報)』	—	—
142	1990	1次	『花立 II 遺跡第1次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第25集	1991
143	1991	2次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第29集	1992
144	1993	3次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第43集	1994
145	1994	4次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第47集	1995
146	1995	5次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第55集	1996
147	1998	11・12次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第73集	1999
148	2001	15・16次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第78集	2002
149	2002	17次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第81集	2003
150	2004-05	18~20次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第92集	2005
151	2006	21次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第108集	2008
152	2007	22次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第110集	2009
153	2009	23次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第116集	2011
154	2013	24次	『平成25年度発掘調査報告書』 * 24次概報収録	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第630集	2014
<b>13 白山社遺跡</b>					
155	1990	1次	『泉屋遺跡第3次、白山社遺跡第1次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第27集	1991
156	1992	2次	『白山社遺跡第2次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第30集	1993
157	1992	3次	『花立 I 遺跡第2・3・4次、白山社遺跡第3次、西光寺跡第2次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第89集	2004
158	2005	8次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第97集	2006
159	2012	9次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第122集	2014
<b>14 加羅之御所跡</b>					
160	1986	1次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第8集	1986
161	1987	2次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第11集	1987
162	1990	3次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第21集	1990
163	1990	4次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第23集	1991
164	1991	5次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第29集	1992
165	1993	6次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第40集	1994
166	1994	7次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第47集	1995
167	1995	8次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第55集	1996
168	1998	12・13次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第73集	1999
169	1999	14次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第75集	2000
170	2002	15・16次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第81集	2003
171	2004	17次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第92集	2005
172	2006	18次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第108集	2008
173	2009	19次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第116集	2011
174	2012	20次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第122集	2014
175	2012	21次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第122集	2014
176	2013	22次	『平成25年度発掘調査報告書』 * 22次概報収録	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第630集	2014

15 鈴沢の池跡					
177	1994	1次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第47集	1995
178	2001	2次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第78集	2002
179	2003	3次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第85集	2004
16 倉町遺跡					
180	1992	1次	『倉町遺跡第1次・志羅山遺跡第11・12・19・22次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第36集	1993
181	2001	3次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第78集	2002
182	2002	4次	『倉町遺跡第4次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第88集	2004
183	2004-05	6次	『倉町遺跡第6次・国術館跡第13次』	岩手県平泉町文化財調査報告書第101集	2006
184	2005-06	7~10次	『倉町遺跡第7・8・9・10次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第104集	2007
185	2006	11・12次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第108集	2008
186	2007	13次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第110集	2009
17 志羅山遺跡					
187	1984	2・3次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第6集	1985
188	1986	6次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第8集	1986
189	1989	7次	『志羅山遺跡第7次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第17集	1990
190	1989-90	8次	『志羅山遺跡第8次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第18集	1990
191	1989-99	9次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第21集	1990
192	1992	13・15~18・20次	『志羅山遺跡第13・15・16・17・18・20次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第35集	1993
193	1992-93	21次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第34集	1993
194	1992	11・12・19・22次	『倉町遺跡第1次・志羅山遺跡第11・12・19・22次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第36集	1993
195	1992-93	14・25次	『志羅山遺跡第14・25次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第216集	1995
196	1993	26・27次	『志羅山遺跡第26・27次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第45集	1994
197	1993	24・28次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第40集	1994
198	1993-94	23・29・30次	『志羅山遺跡 第23・29・30次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第44集	1994
199	1994	35次	『志羅山遺跡第35次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第51集	1995
200	1994	33・34・36次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第47集	1995
201	1994	31・32・37次	『志羅山遺跡第31・32・37次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第49集	1995
202	1995	38・39・45次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第55集	1996
203	1996	52次	『志羅山遺跡第52次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第67集	1997
204	1995-97-98	46・66・74次	『志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第312集	2000
205	1997	69・71次	『志羅山遺跡第69・71次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第71集	1998
206	1998	76次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第73集	1999
207	1998-99	75・77・78次	『志羅山遺跡第75・77・78次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第76集	1999
208	1995~99	47・56・67・73・80次	『志羅山遺跡発掘調査報告書（第47・56・67・73・80次調査）』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第352集	2001
209	1999	81・82次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第75集	2000
210	2000	83~85次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第77集	2001
211	2001-02	87・88次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第78集	2002
212	2002	89-90次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第81集	2003
213	2003	91-92次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第85集	2004
214	2006	94-95次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第108集	2008
215	2007	96-97次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第110集	2009
216	2008	98-99次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第114集	2010
217	2009	100次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第116集	2011
218	2010	101次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第118集	2012
219	2011	102次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第120集	2013
220	2012	103次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第122集	2014
221	2012-12	104次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第122集	2014
222	2012-13	105次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第122集	2014
18 泉屋遺跡					
223	1990	1次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第21集	1990
224	1990	3次	『泉屋遺跡第3次・白山社遺跡第1次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第27集	1991
225	1990	4次	『泉屋遺跡第4次発掘調査報告書概報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第22集	1990
226	1990	2・5次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第23集	1991
227	1991	7次	『泉屋遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第184集	1993
228	1992	8次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第34集	1993
229	1993	12次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第43集	1994
230	1994-95	14次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第47集	1995
231	1993~95	10・11・13・15次	『泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第247集	1997
232	1999-2000	20次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第75集	2000
233	1996-99-2000	16・19・21次	『泉屋遺跡第16・19・21次発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第399集	2003
234	2000	22~24次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第77集	2001
235	2001	25次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第78集	2002
236	2003	26次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第85集	2004
237	2010	27次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第118集	2012
238	2011	28次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第120集	2013
19 国術館跡					
239	1990	2次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第21集	1990
240	1999	4・5次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第75集	2000
241	2003	10次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第85集	2004
242	2001~03	6~9・11次	『国術館跡第9・11次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第90集	2004
243	2004	12次	『国術館跡第12次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第94集	2005
244	2005	13次	『倉町遺跡第6次・国術館跡第13次』	岩手県平泉町文化財調査報告書第101集	2006
245	2005	14次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第97集	2006
20 高術館跡					
246	2001	1次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第78集	2002
21 鈴懸の森遺跡					
247	2008	1次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第114集	2010
22 毛越Ⅰ遺跡					
248	1973-74	—	『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—V—』	岩手県文化財調査報告書第54集	1980
23 毛越Ⅱ遺跡					
249	1973	1次	『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—V—』	岩手県文化財調査報告書第54集	1980
250	1990	2次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第23集	1991
251	2003	4次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第85集	2004
252	2009	5次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第116集	2011
24 毛越Ⅴ遺跡					
253	1993	1・2次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第40集	1994
254	2000	3次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第77集	2001
255	2001	4・5次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第78集	2002
256	2003	6次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第85集	2004
257	2009	7次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第116集	2011
25 毛越Ⅵ遺跡					
258	1994	1次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第47集	1995
27 樋渡遺跡					
259	1991	試掘	『岩手県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ』	岩手県文化財調査報告書第91集	1992
28 柵園Ⅱ遺跡					
260	2006	2次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第108集	2008
261	2007	3次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第110集	2009
262	2009	5・6次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第116集	2011
263	2010	7~10次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第118集	2012
264	2011	11次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第120集	2013

265	2012	12次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第122集	2014
266	2012	13次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第122集	2014
267	2012	14次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第122集	2014
<b>29 柶園 I 遺跡</b>					
268	1994	1次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第47集	1995
<b>30 三日町 III 遺跡</b>					
269	2001	1次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第78集	2002
270	2002	2次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第81集	2003
271	2003	3次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第85集	2004
272	2006	4次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第108集	2008
273	2007	5次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第110集	2009
<b>31 三日町 II 遺跡</b>					
274	1995	1次	『東北電力鉄塔用地発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第58集	1996
275	1999	3次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第75集	2000
276	2008	4次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第114集	2010
277	2011	5・6次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第120集	2013
<b>32 三日町 I 遺跡</b>					
278	1995	1次	『東北電力鉄塔用地発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第58集	1996
279	1998	2次	『佐野遺跡第1次・三日町 I 遺跡第2次発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第313集	2000
<b>33 高玉遺跡</b>					
280	1984	—	『高玉遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第93集	1985
281	2004	3次	『高玉遺跡第3次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第100集	2006
<b>34 佐野原遺跡</b>					
282	1992	1次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第34集	1993
283	1995	2次	『東北電力鉄塔用地発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第58集	1996
<b>35 高田遺跡</b>					
284	1994	1次	『高田遺跡第1次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第52集	1995
285	1994	2次	『高田遺跡第2次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第54集	1995
286	1995	3次	『高田遺跡第3次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第62集	1996
287	1998	4次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第73集	1999
288	2004	5次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第92集	2005
289	2005	7次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第97集	2006
<b>36 佐野遺跡</b>					
290	1998	1次	『佐野遺跡第1次・三日町 I 遺跡第2次発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第313集	2000
291	2000	2次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第77集	2001
<b>37 宿遺跡</b>					
292	1993	1次	『宿遺跡第1次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第41集	1994
293	1993	2次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第43集	1994
294	2000	4次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第77集	2001
295	2002	7次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第81集	2003
<b>38 片岡 II 遺跡</b>					
296	1993	1次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第40集	1994
<b>39 西光寺跡</b>					
297	1985	2次	『花立 I 遺跡第2・3・4次、白山社遺跡第3次、西光寺跡第2次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第89集	2004
298	2005	5・6次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第97集	2006
299	2010	7次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第118集	2012
300	2012	8次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第122集	2014
<b>40 瀬原 I 遺跡</b>					
301	1994・1995	2・3次	『瀬原 I 遺跡第2次・第3次発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第257集	1997
302	2006	5次	『瀬原 I 遺跡第5次・瀬原 II 遺跡第9次発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第507集	2008
<b>41 瀬原 II 遺跡</b>					
303	1994	1次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第40集	1994
304	1998	3次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第73集	1999
305	2000	4次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第77集	2001
306	2004	5～7次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第92集	2005
307	2006	9次	『瀬原 I 遺跡第5次・瀬原 II 遺跡第9次発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第507集	2008
308	2007	10次	『平成19年度発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第524集	2008
<b>42 衣の関遺跡</b>					
309	2005・08	1・2次	『衣の関遺跡第1・2次発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第550集	2010
<b>43 接待館遺跡</b>					
310	2004・05	1・2次	『六日市場・細田・接待館遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第523集	2008
<b>44 細田遺跡</b>					
311	2005	1次	『六日市場・細田・接待館遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第523集	2008
<b>45 六日市場遺跡</b>					
312	2005	1次	『六日市場・細田・接待館遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第523集	2008
<b>46 里遺跡</b>					
313	2000	—	『里遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第383集	2002
<b>47 本町 II 遺跡</b>					
314	2001	2次	『本町 II 遺跡第2次発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第410集	2003
<b>48 畑中遺跡</b>					
315	2003	1次	『一関遊水地内圃場整備関連遺跡発掘調査報告書一竜ヶ坂遺跡第1次・佐藤屋敷遺跡第2次・畑中遺跡第1次一』	岩手県平泉町文化財調査報告書第82集	2003
<b>49 下構遺跡</b>					
316	2002	2次	『下構遺跡第2次発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第446集	2004
<b>50 月館 I 遺跡</b>					
317	1993	2次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第40集	1994
<b>51 新山権現社遺跡</b>					
318	1991	2次	『新山権現社遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第188集	1993
319	1993	3次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第40集	1994
<b>52 佐藤屋敷遺跡</b>					
320	1995	1次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第55集	1996
321	2001	2次	『一関遊水地内圃場整備関連遺跡発掘調査報告書一竜ヶ坂遺跡第1次・佐藤屋敷遺跡第2次・畑中遺跡第1次一』	岩手県平泉町文化財調査報告書第82集	2003
<b>53 小島館跡</b>					
322	2012	1次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第122集	2014

\* 1: 『岩手県平泉町文化財調査報告書』は平泉町教育委員会編集・発行, 『岩手県文化財調査報告書』は岩手県教育委員会編集・発行, 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』は(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター編集・発行, ただし630集は(公財)以下同。

\* 2: 報告書番号1: 平泉遺跡調査会編, 平泉遺跡調査会・中尊寺発行, 同2・3: 國生 尚著, 中尊寺仏教文化研究所編集, 中尊寺発行, 同24・37: 藤島玄治郎編, 東京大学出版会発行, 同38: 平泉町教育委員会編, 平泉町発行, 同40: 文化財保護委員会編, 吉川弘文館発行, 同117: 板橋 源・佐々木博康著, 岩手大学教育学部発行, 同126: 佐伯敬紀著, 岩手県教育委員会発行。